女子新國文

改制
新版

巻二

375.9
Ha17
資料室

42383
教科書文庫
4
810
42-1938
200030
1501

資料室
375.9
Ha7

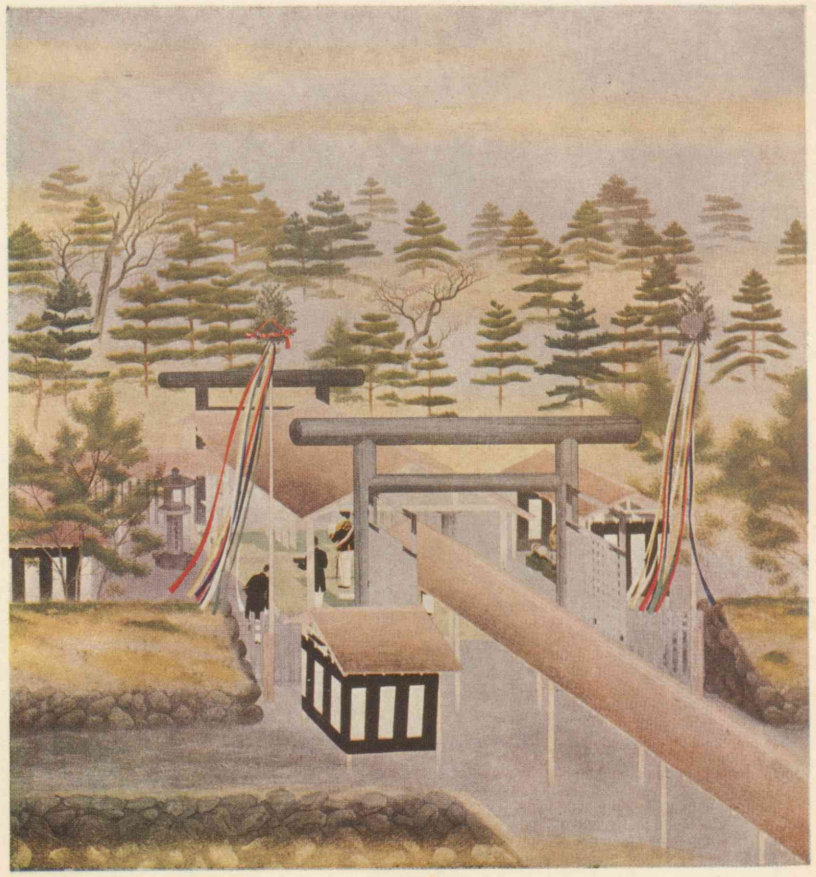
文部省檢定濟
昭和十三年一月十七日　高等女學校・實業學校國語科用

文學博士　芳賀矢一　編
東京帝國大學教授
文學博士　橋本進吉　訂補

女子新國文

改制新版

東京　合資會社　冨山房發兌



明治天皇畝傍御陵親謁　　吉田秋光筆

廣島大學圖書館印

廣島大学
教
40287
図書

女子新國文　改制新版　卷二

目次

一　御修學時代の皇后陛下　その一……大島義脩……二
二　御修學時代の皇后陛下　その二……大島義脩……七
三　月雪花……一二
四　農家の春秋……一八
五　星と花（詩）……土井晚翠……二五
六　天龍川下り……和辻哲郎……二六
七　手紙二信……三四

一　火事の見舞……三四
二　寫眞を贈る……三六
手紙の話（自修文）……三八
八　爽かな心　その一……河野省三……四四
九　爽かな心　その二……河野省三……四九
一〇　南京の壺……柴田鳩翁……五六
一一　小さい旅人……薄田泣菫……六四
一二　諏訪湖畔の冬……島木赤彦……七二
一三　埠頭……長田幹彦……八〇
一四　久能山東照宮……八七
一五　たき火（童謡）……九六

一　たき火……葛原　薗……九六
二　寒雀……川路柳虹……九八
一六　師走日記……服部躬治……九九
一七　新年……一〇五
緣起の話（自修文）……關根正直……一〇八
一八　多年一日の修養……村上專精……一一三
一九　敎化の力……橘　南谿……一一三
二〇　近江聖人の母……村井弦齋……一一六
二一　麥笛……加藤武雄……一一六
二二　新柳（詩）……與謝野晶子……一一四
二三　三都氣質……鶴見祐輔……一一四

英國の強み（自修文）……穂積重遠…一四
二四　禮儀作法……一五
二五　家庭に於ける禮讓……鳩山春子…一六
附錄
通用字表
主要國字表
主要宛字表

明治天皇御製

橿原の宮のおきてにもとづきてわが日の本の國をたもたん

昭憲皇太后御詠

廣前にたまぐしとりてうねび山たかきみいつをあふぐ今日かな

女子新國文 改制新版 卷二

大島義脩　元女子學習院長。兵庫縣の人。昭和十年歿、年六十五。皇后陛下が御學問所で御修學中親しく御進講申し上げた。本文は特に本書の爲に新作したもの。

久邇宮邦彥王　昭和四年薨、御年五十七。

仰ぎ奉る　生れさせ給ひ　拜受せられ　あらせられ　御退學あそばされ

御邸內　久邇宮御邸內。宮家は東京市澁谷區宮代町所在。

續けさせられ

一　御修學時代の皇后陛下　その一

大島義脩

畏くも我等の國母と仰ぎ奉る皇后陛下は、久邇宮邦彥王の第一の姫宮として生れさせ給ひ、大正七年一月十四日、御齡十六の時、將來東宮妃と定められる御沙汰を拜受せられました。その頃、姫宮樣には學習院女學部に御在學あそばされ、民間の子女と共に中等科第三學年御修業中であらせられましたが、右の御沙汰が降りますと、間もなく御退學あそばされ、新たに御邸內に設けられた御學問所に於て御修學を續けさせられました。やがて五年程度の高等女學校の學

帝國圖書館藏

ありがたい（有難）

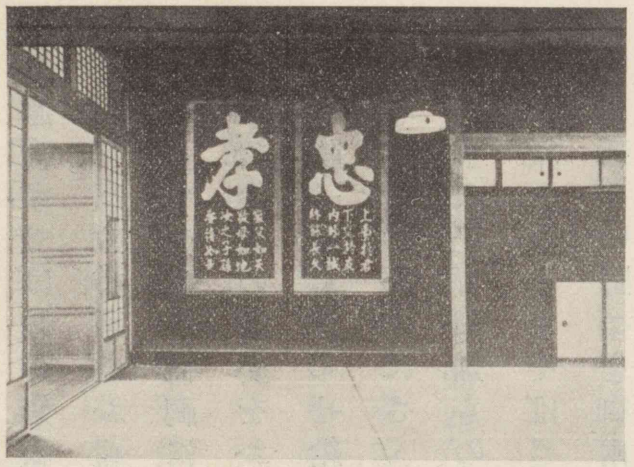
科をへさせられまして更に三學年、高等の學業に就かせられ、それ〴〵專門の講師を召して、普通女性に必要とする課程の外、將來至高の御身分にふさはしい特別の御修養、御學業を積ませられました。そのお忙しい中にも、書道、繪畫、音樂、茶道、花道などの技藝をお磨きあそばされ、殊に御體育に就いては、御兩親の宮樣の思召を體せられ、とりわけ御心を用ひさせられた由に承つてをります。かやうに高い博い教育を受けさせられました事は、これまでの日本女性にはたぐひ稀な事で、まことに貴くありがたい事であります。

その頃の姫宮樣のけだかく麗しい御姿、生き〴〵として御行儀正しい御ふるまひ、お優しくつゝましやかな御言葉

遣は、今、陛下として拜し奉る神々しさを、既にその頃から御身に備へさせ給うたのであります。中にも我等の深く感じましたのは、物事の御理解に敏く、しつかりと要點を捉へさせられる御賢さと、同時に小さい事を疎かにせず、隅々に行渡る御注意の細やかさとで、御聰明は拭ひすました鏡のやうに照輝くのを覺えた事であります。

御學問所外觀
（東京府立第三高等女學校現在）

御學業と並んで、正課の體操を規則正しくあそばされました外、運動としてテニス、ピンポンなど、御學友をお相手に鮮かな御競技ぶりを示されました。また徒歩御登山の事などありまして、男子も及ばぬ御健脚で、常に先頭に立たれ、お供の者の疲れを見そなはせられて、御微笑をたゝへていたはらせられるなど、ありがたい事でありました。總じて御動作の常に快活敏捷にわたらせられたのは、本來御强健なる御體質の上に、かうした御運動の效によ



御學問所内部

見そなはせられて
たゝへ（湛）

御動作が快活敏捷
にわたらせられ

らせられたものと思ひます。

久邇宮家では敬神崇祖の思召篤く、御邸内の一區を淨めて、其所に皇大神宮と、お祖先以來御歴代のみたまとを祀られてあります。この御祠に朝ごとの歩みを運ばせられ、額づき拜み給ふ花の御姿をお見上げ申さぬ日とてはなく、霜の旦、雪の曉、一度も怠らせ給うた事はなかつたと承ります。

御學問所のお庭にさゝやかな花壇と菜園とを設けさせられ、四季の花もの、畑ものを作らせられましたが、專ら御自身のお樂しみとあそばされるのではなく、時をり〳〵の美しい花、新しい野菜を、御兩親の宮様に捧げられてお慰め申され、また御共々に御膳に上せられて、御だんらんの興を添へさせられるのであります。乙女心にふさはしい御孝養の一端と拜しました。

お見上げ申さぬ日
設けさせられ
捧げられて
だんらん（團欒）
拜しました

二　御修學時代の皇后陛下 その二

おそばに仕へ奉る者に對し、お優しい御心遣はもつたいない程で、傳へ聞いても感涙に咽ぶばかりであります。今、御學友の思出話から二つ三つを拾つて見ませう。

「前後五年の長い御奉仕の間に、たゞの一度でも、どんな事があつても御不快げな御樣子を拜した事はありません。御間近にをりますと、家庭にゐる時よりも卻つて明るい晴れやかな氣分になりますので、毎日の出仕が待遠しい

たゞ（唯、只）
待遠しい

だい〳〵（橙）
賜はりました
採らしめて

程でありました。」

「或日、早朝の雪を冒して出仕いたしますと、直ちに御座近く召されまして、『これは身内が溫まるさうだから。』と、お言葉を添へて、だい〳〵湯を賜はりました。途中の寒さを思し召され、お庭先の樹の實を採らしめて、お待受けあそばされたと承りました。お湯の暖かさにもまして、お情の厚さに寒氣を忘れました。」

「御日課の餘暇御くつろぎの時、御談笑のうちに、ふと誕生日に就いてお尋ねを蒙りまして、何心なくお答へ申し上げましたところ、よく御記憶に留めさせられ、當日に至り思ひがけなくお祝の品を賜はりましたので、先の心ないお答を恥ぢ、恐れ入りました。」

うかゞはれて

赤倉
新潟縣中頸城郡名香山村。

いらせられましたが

このやうなお話を擧げますと、限りもなく盡きないのでありますが、御心ばへの美しさは、些細な事の端にもうかゞはれて、忝い極みであります。

…於かせられても

聞し召され

大正十二年に、かの恐しい震災が關東地方を襲うた時、幸にも久邇宮御一門は赤倉の御別邸に御滯在でいらせられましたが、すぐに東京にお使を遣され、當時講師であつた筆者の宅にまでも、御見舞のお言葉を傳へさせられました。赤倉に於かせられても、日ごとに增す避難者の氣の毒なさまを聞し召され、御母宮樣、御妹宮樣と共々、二三の侍女をお相手に御手づから針を運ばせられ、男物、女物、子供物各五十枚

伸ばさせられました

御出でまし

づつの衣類を仕立てられ、避難者に頒ち賜はるやう御沙汰がありました。

かうした御慈愛の御手は、遂に小鳥の上にまでも伸ばさせられました。御學問所に一羽の鳩を飼はれまして、そのお世話を、まことに御辛抱強く、御親切にこまゝ〳〵とあそばされ、お氣長に馴らされました。鳩も次第におなつき申して、終には御髪や御肩に上つたり、御掌から豆を啄んだりするやうになりました。御學習の時間、御緣を隔てて手摺にとまり、懷かしげに内をのぞいてゐる風情は、あはれに愛らしいものでありました。愈〻妃殿下として御入内の日、御出でましの御車の上を舞翔り、幾たびか旋廻して御名殘を惜しむ樣子

せんだん（梅檀）

拜察いたします

は、見る者の眼に一滴の露を宿させたと語り傳へてをります。

今、雲居の宮高く萬民に臨ませ給ふ皇后陛下の御修學時代を顧み奉りますと、まことに「せんだんは二葉より香し」の喩の通りであります。主上に奉仕し給ふ御坤德、皇子皇女を撫育し給ふ御慈愛、民草を憐み給ふ御仁惠、いづれか天資に出でさせ給はぬはありませんが、また御教養の深く博いのにもよる事と拜察いたします。天成の玉も磨かれてこそ光を四方に放つと申すべきでありませう。

でつち（丁稚）

教へられて

三　月雪花

春はハナミ、夏はスヾミ、秋はツキミ、冬はユキミ。夏のミだけが月雪花三つの眺に關係はないが、夏の月夜の涼はまた格別に快い。春の花見は昔の大宮人にも、今のでつち小僧にも、一年間の最大歡樂である。芋、栗を捧げて秋の月を祭る風俗は、同じく一般國民的の雅興である。「お月樣いくつ」の俚歌、「雪よふれ〳〵」の童謠、月雪花の風流は子供の時から教へられて、我等の頭にしみこんでゐるのである。

月雪花を見て感ずるのは、歴史的懐舊の念が添ふからである。我が國の櫻花は、唐土人も高麗人も美しいと言ふに違

感ずる

何の興味をもつてをらぬ

もてあそぶ（弄）

皎々たる明月

皚々たる白雪

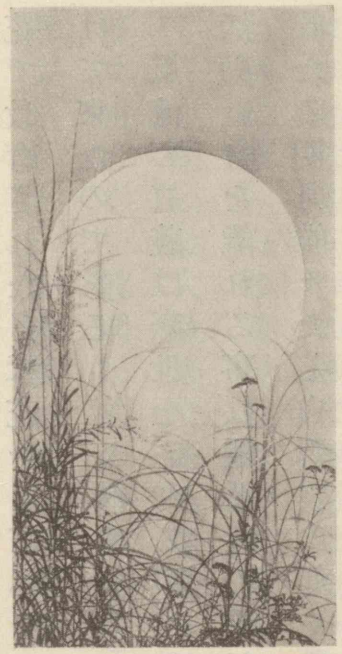
いかなる人

ないが、彼等の感ずるところと、我が國民の感ずるところとには、大きな徑庭がある。西洋人は觀月といふ事に關しては、殆ど何の興味をもつてをらぬ。我等は子供の時から月雪花で教育された。月雪花をもてあそぶといふ詩的教育を受けて來たのである。

風流の眞義は塵世を忘れる事である。全く塵世を忘れて活動社會を離れる事は隱遁者の所行であるが、少くとも皎（けう）皎たる明月、皚（がい）々たる白雪、雲の如く霞の如き花に對して、これを眺めてゐる間は、いかなる人も利慾に營々たる實社會を忘れるのである。月雪花の效用は美術と同じく、人を高尚にし、人を溫雅にするのである。

譬へる
さうして
用ひる

我等日本人は月雪花を大いに觀賞して、これを人事と結合した。高尚な人格はこれを月雪花に譬へる。「月に叢雲、花に風」月の入るのや、雪の消えるのや、花の散るのは、これを人の蹉跌や死去に譬へる。さうして繁榮、隆昌、幸福は月雪花の美に比較した。古來の吟詠はすべてこの譬喩法を用ひてゐる。


秋仲（筆城直田深）

我等は月雪花を尊敬し、月雪花に種々な美德を附加する。無情なものを有情化した上、更にこれを有德化するのである。

熟語されて
月はおほふ
爛漫たる美しさ
備へてゐるやうに
さう感ずる

る。

月は公平無私、寸毫も汚のないものとして、光風霽月（せいげつ）などと熟語されて、君子人の赤心に比べられる。月をおほふ雲はその光明をおほふものとして、小人邪佞の徒になぞらへられる。

また雪は氷潔一點の塵のない事から、冷い嚴肅なところを見て、潔白な精神や節操の動かない事を聯想する。

花は爛漫たる美しさの、忽ち風に散行くのを惜しんで、節義の士が身命を擲つのに譬へる。月や、雪や、花やに靈があつて、これ等の德を備へてゐるやうに感ずるのである。古人がかく感じ來つたそのまゝをうけついで、我等もさう感ずる

保己一　江戸時代末期の國學者。塙氏。通稱辰之輔。武藏の人。文政四年（一八二一年）歿、年七十六。

南殿　紫宸殿のこと。

のである。

月雪花を觀賞し得る我等は幸福である。盲人の學者保己一の逸事として傳はつてゐる話に、或時月に對して、

花ならばさぐりても見んけふの月

といつた。

また京都に上つた時御所の南殿の櫻の花盛と聞いて、

目に見ねばせめてなでんの櫻かな

と戯れた。

東海道で富士の山下を過ぎる時には、

言の葉の及ばぬ身には目に見ぬも
なか〳〵よしや雪のふじのね

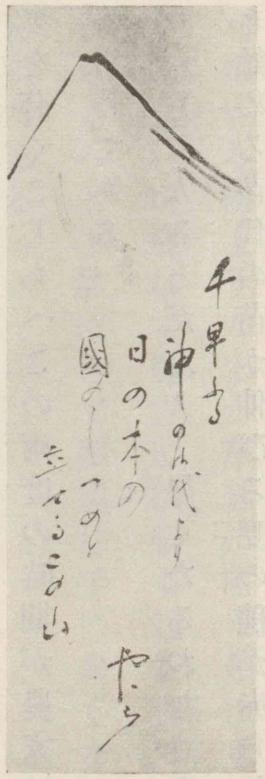
千早ふる神の御代より日の本の國のしつめと立てるこの山　やいち

はうふつ（髣髴）

肉眼を以ての月雪花　眺め得る

といつた。

月雪花の眺を恣にする事の出來ない民族は不幸である。月雪花があつても、これに附加された傳說をもたない民族もまた人生の興味に乏しい。我等は月雪花に對して、古來の文學を味はひ、國家を憶ひ、品性を養ひ、國民性を知る事が出來る。月雪花を通じて、我が國民の歷史ははうふつとして眼前に浮ぶのである。保己一は肉眼を以ての月雪花は見なかつたが、心眼を以てのそれは眺め得たのである。



矢一筆蹟

春と秋とに

こしらへ（拵）

腐らせてしまふ。

四　農家の春秋

毛附、毛上といつて、農家の特に忙しい時が、春と秋とに二度ある。春は麥を刈取つて田を作る準備、秋は稻を取入れて麥を蒔くこしらへ、この兩度の時期が、農家にとつて一番の骨折時である。

六月に入ると、だん〳〵暑くなる。ねむさうな聲で蟬が鳴き始める。苗代の苗が伸びる。麥の穗が赤らむ。かれこれするうち梅雨になるから、それまでに麥を取入れなければ腐らせてしまふ。二十一二日は夏至で、その前後一週間程のうちに、田植もしなければならぬ。夜は短くなる。蚊が出て來る。農家のこの時分の忙しさ。雨上りには麥畑がまだじく〳〵してゐる。

しかし、季節は待つてくれないから、小さい笠をかぶつて刈始める。雨上りの土が草鞋に附く。足は重い。鎌が切れなくなる。疲れに疲れて、眞晝には眼も眩む程である。都會の人はからころと下駄ばきで、團扇片手に、暑くなつたと言つてゐる頃である。

麥はやう〳〵刈入れた。一家の田地何十町歩あつても、この一週間のうちに田植をしまはなければならぬ。其所にも此所にも勇ましい田植歌が聞える。

明治天皇の御製に

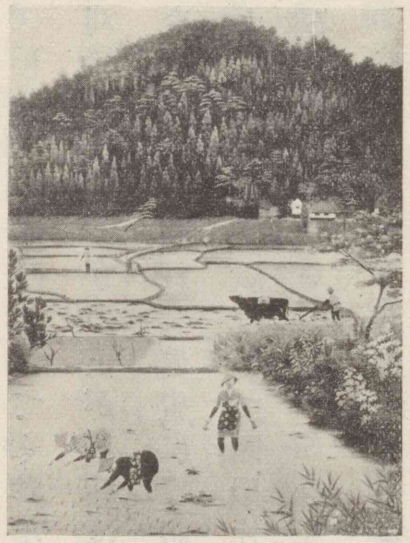
田うゑ。

つく（搗）

きしる（軋）

つばめとぶ影のみ見えて田うゑ時
家に人なき小山田の里

一村かくの如く賑はつて、二十五六日頃には一面見渡すかぎりの青田になる。青葉の山も畫のやうに映つてゐる。これでまづ一安心と、二三日うち通しての毛附休。餅もつき、御馳走もする。



水田の六月（中村德二筆）

都會の人は狹苦しい家の内で、電車のきしる音を聞いて荷馬車や自動車の塵を吸つてゐるのである。

小山田の云々　江戸時代の歌人太田垣蓮月尼の作。

ひとく

農夫が立つてゐるやうで

農夫は實に案山子そのものである

稼穡の爲に忙殺される

大風が吹かうものならそれこそ……

なつてしまふ

上御一人におかせられても

小山田の霧の中路ふみ分けて
ひとくと見しは案山子なりけり

風が吹いても、雨が降つても、案山子は田の中に立ちつくしてゐる。ふと見れば眞の農夫が立つてゐるやうで、驚くものは鳥獸ばかりではない。

農夫は實に案山子そのものである。粗衣粗食で、年が年中田畑に出て、稼穡の爲に忙殺されてゐる。二百十日の心配は一通りではない。この頃はちやうど中稻（なかて）が穗を出す時分で、一たび大風が吹かうものなら、それこそ夏中の辛苦艱難も皆無になつてしまふのである。我が國は古來農の國である。心配するのは農夫ばかりではない。恐多くも上御一人にお

照るにつけ云々　明治天皇御製。

かせられても、

照るにつけくもるにつけて思ふかな

わが民草のうへはいかにと

と御心配あそばすのである。

この恐しい二百十日、二百二十日の厄日が過ぎると、やがて天氣も固まつて、九十、十一と三箇月は、秋晴玉の如き小春日和となる稲はこの間に早稲、中稲、晩稲と順々に實のつて行く。

取入が始ると、こゝにまた農家第二回の多忙な時節となる。日は一日々々短くなる。早く取入れて、また麥を蒔かねばならぬ。その忙しさは田植時分の比でない。田植の仕事は、何

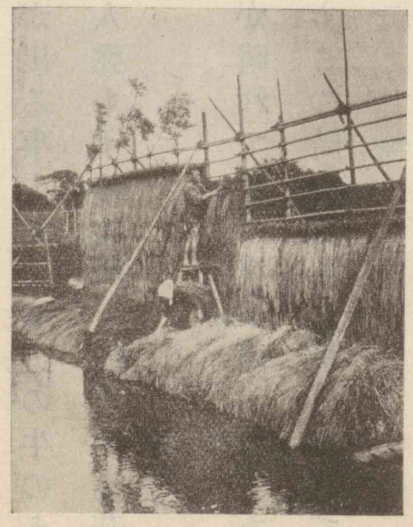
すく（鋤）

時候が時候だから

くらゐ。

といつても水仕事である。田をすいて水を入れ、これに稲の苗を植ゑるのである。稲は水生植物であるから、少々雨が降つても、風が吹いても田植が出來る。まして時候が時候だから、水田の仕事は卻つて心持がよいくらゐである。

然るに稲刈の時は、刈つた稲をぬらしてはならぬ。雨の降らないうちと、夜を日に繼いで働く。つらいのは麥蒔で、十一月下旬から十二月上旬にかけて蒔く。日が短いから、半分は夜業である。夜は十時、十一時頃まで野で働き、朝はまた四



とりいれ

鎌のやうな月
くは（鍬）
うなり（唸）
いなゝき（嘶）
堪へかねて
たどる（辿）

時頃から起きて行く。やつと溫かくなつた寢屋を捨てて、眼をこすり〳〵出て行く。鎌のやうな有明の月が西の空にかかつてゐる。まだ夜が明けない。くはで土塊を打つと、刃が小石にあたつて、はつしと火花が出る事もある。遠近の牛のうなり、馬のいなゝきが聞える。人聲もする。此所も彼所も麥蒔である。

六時頃日が出る。山際の雲が晴れて、東の空が薄明るくなつた頃の冷たさ。地の凍るのもこの時分である。堪へかねて焚火するのも遠近に見える。

思ふに、農家一年のうち、この季節程心忙しく、且苦しい時はあるまい。都の人々はまだ溫かい夢路をたどつて、電車も

働いてゐる

土井晚翠
詩人。名は林吉。第二高等學校名譽教授。明治四年仙臺市に生れた。

通らなければ、牛乳配達も通らぬ時分、田舍は人々皆目覺めて働いてゐるのである。我等が毎日口に入れる米や麥、たゞの一粒も容易に出來たものではない。

五　星と花

土井晚翠

同じ自然のおん母の、
み手にそだちし姉と妹、
み空の花を星といひ、
わが世の星を花といふ。

かれとこれとに隔たれど、

和辻哲郎
哲學者、批評家。文學博士。東京帝國大學教授。明治二十二年兵庫縣に生れた。

にほひは同じ星と花、
ゑみと光をよひ〳〵に、
かはすもやさし花と星。

されば曙くも白く、
み空の花のしぼむとき、
見よ白露のひとしづく、
わが世の星に涙あり。

六　天龍川下り

和辻哲郎

愈〻舟に乘りこむと、舳先に立つてゐる船頭が、かいでぱんたゝく（叩）ぱん〳〵と舷をたゝく。その音が霧を貫いて、水の上を遠くまで響いて行く。出發といふ波立つた心持が、いかにもふさはしくこの響に表されてゐる。この出發は天龍川下り全體のうちで、最も印象の深いものゝ一つであつた。

船頭は前に二人、後に二人ゐる。四人ともかいを持つてゐる。瀨の所に來ても、二つのかいで舟を操縱する。一二箇所の瀨を下ると、すぐに天龍峽にはいつた。霧の中に、兩岸に切立

つた山が見える。下方は全部巨巖である。その間を舟は一時間約十一二キロメートルの速力で下つて行く。河幅は狹いが水量が多いので、急流である割合に危險な氣持がしない。それよりも、寒さと、時々舷を越えて來る飛沫とが氣になる。兩岸の巨巖は實に澤山ある。「勿體ない。」「贅澤だ。」といふ言葉さへ使ひたいくらゐに。紅葉はもう色が褪せかゝつてゐるが、霧の間に隱見するところはまことによい。愈天龍峽にはいると、皆は「來てよかつた。」と言つたが、さ

使ひたいくらゐ

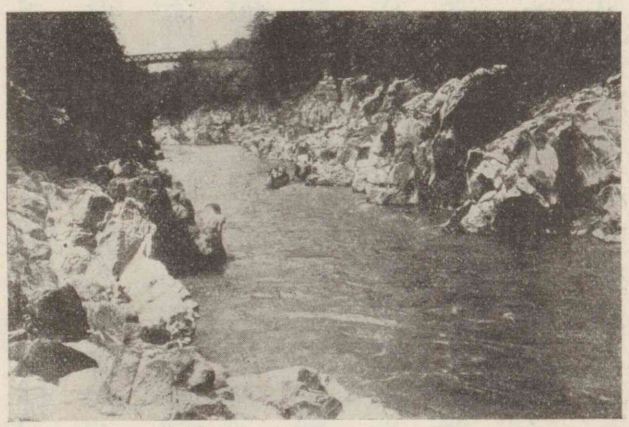
天龍川上流

ういふ景色が、絶えず變化しながら何時までも續く。過去つて惜しいと思ふ隙もないくらゐに、後から〳〵現れて來る。

それが一時間も續いたであらう。受けた印象の量から推せば、かなり長かつた。人々はもう天龍川に親しみを感じて、曾て難船があつたといふ茶々淵に來ても、大して難所らしくは思はなかつた。難所に來るごとに、先頭の船頭はばんばんと舷をたゝいて警戒する。そのばん〳〵といふ勇ま

絶えず

茶々淵に來ても大して



天龍峽

呼ばれる

しい響を待つやうな氣分にさへなつた。

始めて山が開けて、村が見えた。橋があつた。その橋の下流に櫓の瀧と呼ばれる天龍第一の難所がある。餘り長くもない瀨ではあるが、三丈三尺の落差があるといふ。舟は矢のやうに流れて行つた。舟底はがら〳〵と石にぶつつかる。飛沫は容赦なく飛びこんで來る。しかし、船頭はかいで巧に舟を導いて行く。下の淵に突進んだ時には、舟

櫓の瀧

かういふ所

見られる

の舳先はもう岩を避けてゐる。この難所を通つたのは、午前七時半頃であつた。

その後は追々山が開けて、村の見える事が多くなつた。霧も晴れた。畑が見える。竹藪が見える。河原があるが、迫つた山の間をぬけて、穏かな村の景色を見、やがてまた迫つた山の間へとはいつて行く心持は、自分にとつては、天龍峽よりも卻つてよかつた。かういふ所にも人が住んでゐる。さうして激しい自然と戰つてゐる。それを眺めてゐると、長く〳〵流れて行く天龍川の心が、自分の胸にも通つて來る。この自然と、さうして人間と、――人間の姿は、此所にも見られるではないか。自分は河原の砂の上で遊んでゐる子供の姿を見て、

天龍川としては

まつしぐら（驀地）

南畫にでも

突如として

中部　靜岡縣磐田郡佐久間村の字。

涙ぐましい心持になつた。

天龍川としては、信濃の國境を越える前後の二時間程の間が、荒つぽく、大きく、天龍の名にふさはしいものであつた。

岸に立つ巨巖はもう見られない。しかし、激しい流が滔々と流れて行き、その上を、木の葉のやうな舟が水に揉まれながら、まつしぐらに落ちて行く感じは、前には見られないものであつた。このあたりは山の形も餘程違つてゐる。南畫にでもありさうな山が三つ重なつて、突如として目の前に現れたのも、このあたりであつた。

午後一時過、製紙會社の工場のある中部（なかつべ）まで出ると、餘程氣分が違つて來る。此所からは山の形もすつかり變つた。地

西川、戸倉　共に靜岡縣磐田郡龍山村の字。

つち（槌）

いかされる

質が別になつてゐるらしい。この後も迫つた山の間を流れて行く事は同じであるが、暫くの間は感じが小さくなる。

我々の氣分にも、大分倦怠の心持が加つた。が、やがて二時間も經つと、西川（さいかは）、戸倉といふやうな、妙に感じの深い村へ出る。戸倉の河原では、船大工が巧妙なつちの調子を取つて、船を修繕してゐた。その邊からは谷も開けて、いかにも大河らしい氣分になつて行く。河原も大きい。その荒涼の感じが、ちやうど迫つて來た夕暮と相應じて、天龍川下りの最後の三時間は、また忘れがたい印象を我々に殘した。

稍倦み疲れた氣持で、暮行く山と河とを眺めてゐると、その倦み疲れた氣持が、周圍の景色の中にいかされて來る。廣

い河原のもの寂しさは、ちやうど我々の心にふさはしい。薄暗くなつて行く水面の、何となく味氣ない氣持は、最早我々を乘せて流れて行くのに倦んだかのやうに見える。船頭もまた倦んだ。しかし、それでいゝ。やがて月が現れた。それも薄曇の空である。

倦んだかのやうに

それでいゝ

七　手紙二信

一　火事の見舞

只今夕刊を見てをりました父が、急に大聲で呼立てますので、走つてまゐりますと、今朝お宅あたりが火事だつたとのこと。びつくりして、類焼區域の番地を調べて

走つてまゐりますと

見ますと、まことにあやふやで、おまぬがれになつたらしくも、また御類焼の憂き目にお逢ひになつたらしくも思はれます。ほんたうに私は立つたりゐたりしてをります。どうか御無事であつて欲しい。お取込中でせうが、をり返し御返事お聞かせ下さいませ。早々。

おまぬがれになつた

……あつて欲しい

右の返事

ありがたうございました。ほんたうに危いところ、裏にあつた三十坪ばかりの空地のお蔭でやつと助かりました。勿論火の子は雨のやうに降つて來ますし、煙はむうむう寄せて來ますし、もう焼けるものと思ひきつてゐました。風足が早かつたので、父も母も「命だけ、命だけ」。

ありがたうございました

と叫んで、何一つ取出しもせず、六人の子供をつれて逃出しました。眞夜中の事だし、その混雑と申しましたら、ほんたうにこの世ながらの地獄の思でした。

混雑と申しましたら

やつと類燒はのがれたとは言ふものゝ、消防たちにふみ荒らされて、家は全く見るかげもなくなつてしまひました。でも、屋根の下に、ともかくも自分の家にその夜から寢られたのですから、皆が思はず神様にお禮を申さずにはゐられませんでした。お察し下さい。鉛筆の走りがき、御はんどく下さいませ。早々。

でも

寢られた

二　寫眞を贈る

お約束にそむくのはつらうございますし、と言つてこの寫眞を差上げるのはなほつらうございます。よく寫したいと思ふのではございませんけれど、このやうな反身の氣取つた姿では、どうしてもあきらめられませんぢきまた寫し直して差上げますから、その時にはこれはお返し下さいませ。誰にもお見せになつては嫌でございますよ。後生お願ひですから。かしこ。

つらうございます

右の挨拶

ありがたうございました。寫眞をほめてはお世辭にならないと申しますから、では他人らしく惡くおとれになつたと申して置きませう。全く氣取つてなんかいらつしやるのではございませんが、心もちお年よりおふ

あきらめられません

では

いらつしやる

けになつてとれてゐるかも知れません。でもお目許から鼻筋、美しいお髪などはやつぱりそのまゝの初子さんで、お懷かしうございます。それでは大事にしまつて置いて、時々一人で出して眺める事にいたしませう。ほんたうにありがたうございました。かしこ。

（書翰文講話及文範）

いたしませう

社會生活　人間がお互に助け合ひ力を合せて暮して行くこと。

業務や交際の用を云々　仕事やつき合ひがすまされない。

自修文

手紙の話

一生の間筆を持たずにをられる人はまづあるまい。筆を持つのは文を書く爲であるが、就中手紙や葉書等の用文を書くのがその大部分で、社會生活をしてゐる以上、何人も手紙を書かずにすますといふ事は出來ない。これを書かないと大切な業務や交際の用を辨じない。元來手紙は机に對つてゆつくりと文を綴るといふ場合よりも、もつと緊急な、手近かな、また直接な用事を果すもので、生活上の俗用が主となつてゐる。隨つてこの方の目的を達するか、達しないか、響の聲に應じるやうに、何等かの反應がなければならぬものである。反應が起れば必ず利不利が伴なふ。から考へて來ると、手紙ほど眞面目なものはない。手紙ほど眞劍なものはない。

世間には文章を巧く書きたいといふ人が澤山ある。それは決して道樂からでなく、實際の必要を感じての事であるが、まづ普通に文章の入用なのは、ものの覺書をする場合、ものを說明する場合、廣告する場合、議論する場合、或は感に餘つてその時の心持を記して置く場合などで、この外の能文の必要なのは專門の文人や、學者や、著述家の事であらう。もと〳〵文章は晴れなもの故、

緊急　さしせまつたこと。

俗用　世の中のありふれた用事。

響の聲に應じるやうに　聲を出すと響がすぐ返つて來るやうに。

反應　その事に應じて起る變化。

道樂　ものずき。

能文　巧みに文章を書くこと。

利害を左右する　利害に影響を及ぼす。

狩野の軸　狩野派の畫家の描いた掛物。狩野派は室町時代の畫家狩野正信を祖とする日本畫の一派。

交趾の置物　交趾燒の置物をいふ。交趾燒は、昔安南から舶來したもので、彫刻模樣の上に、いろ〳〵の釉を施した西洋趣味に富んだものである。

文よりは質云々　外の飾よりはその內容、はでよりも實際もの役に立つといふ方に：。

少しでも巧く書きたいといふのは尤もな希望であるが、それよりも數倍我々の身に近い、朝目が覺めるから夜寢るまで、をりにふれ場合に當つて始終必要な書翰文の巧拙に就いて氣をもむ人の少いのは、異しむべき事ではあるまいか。

日本人は最近の數年間に自覺心が非常に進んだと言ふ。けれども毎日直接自身の利害を左右する書翰文を大切と思はぬやうでは、自覺の程度も知れたものである。床には狩野の軸が掛けてあり、卓の上には千金の値ある交趾の置物が置いてある。然るに、その家の子供の遊ぶ部屋があるか、臺所の設備は完全かといふに、そんな事は構つてないとしたらどうか。健全な自覺ある新興國民は文よりは質、華美よりは實際的な方に、まづ注意を向けなくてはならぬ。

さて、今日世界中で一番多く手紙(葉書とも)を出すのはイギリス人で、毎年一人の平均七十八通、次はアメリカ人で六十七通、ドイツ人は五十五通である。日本人はわづかに二十六通で、ノールエー人と同じである。これで直ちに業務の忙閑及び社交の程度をトする事が出來よう。西洋人の筆まめ手紙まめなのには實に驚く。散歩に出たといつては手紙を書き、雨が降つたといつては消息をする。犬が子を產んだ、果物が實のつた、何だかだといつて手紙を出す機會を作る。五つや六つの時から、

一人の平均七十八通　これはいづれも數年前の統計であるから、現在ではずつと多くなつてゐる。

程度をトする　度合を判斷する。

消息　たより。

「かあさま、ぼくすこしばかりじがかけるやうになつたから、かあさまにてがみをかきました。それからおぢいさまにかきました。犬へんくるしんだのです、さうして犬へんじかんがかゝつたのです。ごへんじをください。さよなら。」

などと、かはいゝ筆で一軒の內の親や兄弟に手紙を出す。國の風と言つてしまへばそれまでであるが、かういふ國風は見習はせ

文言の呼吸語句、文章の用ひ工合。

世界の大勢に伴なふ事は云々世の中のなりゆきに一緒について行く事が出來ない。

て面白い事と思ふ。かやうに手紙をまめに書くから、手紙の必要や利益を解する事も深く、自然注意も行屆き、文言の呼吸も覺えて、誰も〳〵巧く書けるやうになる。然るに我々のやうに、忙しい、面倒だからといつて、なるべく手紙を書くまいとし、人から來た手紙の返事さへ何日も怠つたりするやうでは、偶〻筆を持つても一向ぞんざいで、文句も何も構はぬやうになる。甚だしいのは、書いてから讀返しもしないで出す事さへある。一は注意するから益〻上手になり、一は構はぬから益〻下手になる。大變な相違である。

とにかく、手紙は必要なもの、大切なものとわかつたら、今までのやうに書翰文を輕視しないで、その方法を研究し、技術を修養する事他の學藝同樣にあつて然るべき事と思ふ。總じて物事を粗末にするのが不幸の始である。手紙などはどうでもよいと言つてゐるやうな人は、自覺的な世界の大勢に伴なふ事は出來ぬ

人後に落ちる他人のあとになる。

情意を交換し云々お互に心持を話し合ひ、用事の趣意をのみこむ。埒が明くかたづく。

から、何時の間にか人後に落ちてしまふ。何にせよ、ある用事を辨ずる爲に態〻服裝を整へて戸外に出で、或は汽車、車に乘り、或は徒歩し、多くの時間を費して先方に到著し、さて面會の上で用事を談じ、終つて暇を告げ、また長途を歸つて來て、それから不斷著に著換へて始めてくつろぐ。これ程の大手數をする代りが一本の手紙、一枚の葉書ですむと思つたら、どれだけ念入りに文句を考へて書いてもいゝわけである。たゞ出かけて談ずると違つて、その場で情意を交換し、要領を得てしまふといふ事は出來ぬから、それだけは文章に注意して、なるべく一度の書信で埒の明くやうに書かねばならぬ。それ故手紙の文は言語の筆記だけではいかず、相應に特殊の修業を要するものである。普通の文章さへ巧く書ければ、手紙などは易しいといふ人があるが、實際は決してさうでない。文章の上手と手紙の上手とは別である。古今とも能

文家が必ずしも手紙の上手と限らぬ。これ故に手紙の文は特に修業する必要があるものである。

（書翰文講話及文範）

河野省三
倫理學者。文學博士。國學院大學學長。明治十五年埼玉縣に生れた。

八　爽かな心　その一

河野省三

私どもは、晴れた日に東海の天に聳える富士山の姿を仰ぎますと、何となく麗しい崇高な氣分に打たれるのであります。また朝日に映る山櫻の姿を眺めますと、自然に、晴々した雅やかな氣分になるのであります。日の丸の旗がひらひらと飜つてゐるのを見ますと、そこに活動的な生き〳〵とした氣分が起つて來るのであります。

或はまたかの明治神宮に參拜しまして、神宮橋を渡り、白

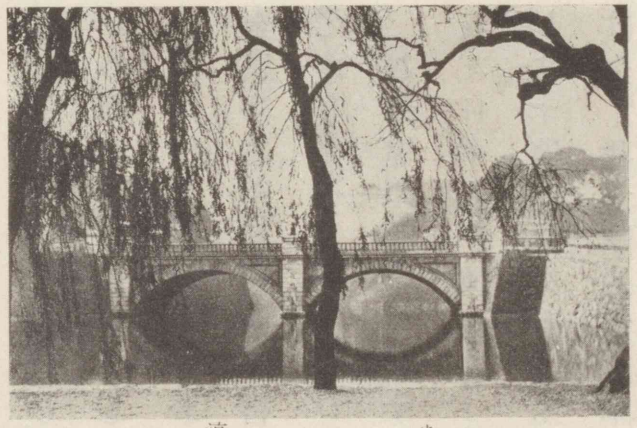
木のお鳥居をくゞり、清淨な參道に吸ひこまれるやうに進んで清い水で手を洗ひ、口を漱いで御社殿前に參りますと、おのづからすが〳〵しい尊い氣分に包まれて來ますし、更にまた松の綠の滴るお濠の前に立つて、我が皇室の御隆盛を思ひますと、何とも言へぬ神聖な氣分が湧起つて來るのであります。

これ等の神々しく、すが〳〵しく、晴々しい心持こそ、實に我々日本人が遠い〳〵昔から養つて來た心の眞の姿であります。肇國以來、私どもの祖先が育て上げて來た純眞な心は、全く我が國民性の本質でありまして、いはゆる大和魂の眞髓であります。

これ等の神々しく、すが〳〵しく晴々しい心持こそ……姿であります

いはゆる（所謂）

かゝるさつぱりとした、廣い、しかも力强い氣分の充ち滿ちた心が、卽ちほんたうの眞心でありまして、この眞心から出るこれ等の神々しく、すがゝしく、晴晴しい氣分こそ、最もよく人生を美化し、私たちの生活を幸福に導くものであります。



濠　お

明治天皇の御製に、

もたまほしきは心なりけり
さしのぼる朝日の
ごとくさわやかに

とお詠みあそばされてありますが、この爽かな心こそ取りも直さず、かやうな純にして直なる氣分に外ならないのであります。

私どもが、この世に於て毎日々々の生活を營むに當りまして最も大切な氣分であり、且價値のある態度は、まことに爽かな心であります。

この爽かな心は、晴々しい廣い心持であります。徒にものに屈託しない、ゆつたりとした心であり、また妄りに他を排斥しない、おだやかな心であります。この心からして、かたよりのない、おほどかな氣分を味はふ事が出來るのであります。

爽かな心は明快な裏表のない心持であります。

爽かな心は明快な、裏表のない心持であります。世の中では、溫味のある、生き〳〵とした生活が最も望ましいのでありますが、僞らない、正直な、天眞爛漫な態度が最も力强い生活であります。

宗教の生命もまたこゝにあると信じますが、天眞爛漫は卽ち爽かな心の本體であります。

爽かな心はかく淸らかで、溫味のある、生き〳〵とした心持でありまして、建設的に、有意義に、すべて物を生かして行くところの積極的精神であります。いはゆる「朝日の豐榮昇る」氣分が卽ちこの爽かな心の働であります。

私たち日本人は、かういふ爽かな心を根柢といたしまして、この尊い國體を築き上げ、このりつぱな國民道德を形づくつて來たのであります。我が日本人の國民精神の現れである神道は、卽ちこの爽かな心を以てその根本としてゐるのであります。神道に就いては、古來いろ〳〵の說がありますが、畢竟はこの爽かな心、純眞な氣分に生きるところの日本人の生活の原理で、日本民族の傳統的信念であると思ひます。

九　爽かな心　その二

この神道の精神を最もよく看破した一人は、今から百五十年前に、伊勢國松阪にあつて、當時の學界を風靡した本邦

松阪　三重縣松阪市。

本居宣長　江戸時代中期の國學者。鈴屋と號した。享和元年（二四六一年）歿、年七十二。

たゝへた

さうして

空前の大學者本居宣長であります。この宣長の詠んだ有名な歌に、

敷島のやまと心を人問はゞ
　あさひに匂ふ山ざくら花

といふのがありますが、この大和心も、まさしくこの爽かな心の姿をたゝへたものであります。宣長は全生命を捧げて、この大和心の眞髄を發揮すべく努力した人であります。力を極めて、この日本人の持つてゐる心の本來の姿に存するところの感情の麗しさ、眞の尊さを說いた人であります。さうして、ひたすらに我が國家を愛する道を、力强く主張した人であります。

かう　いふ　心持

朝日に匂ふ山櫻花はいかにも淸らかであり、さうして單純に、さつぱりした眺であります。嫌味とか、毒々しいとかいふところのない、淸い雅やかな姿であります。そこに私ども日本人としての心の特長が現れてゐるのであります。私たち日本人の祖先は、かういふ心持を明るく、淨く、直き心とも申しまして、道德の根柢となる心は此所にあると信じてをつたのであります。

かゝる爽かな大和心を本質とする神道は、たゞこの雅やかな心を以て、一途に我が皇室を尊び、我が國家を愛したのでありますから、神道の信仰が人性の自然に存してゐる事は明らかであります。神社は我が神道を形に生かした經典

でありまして、かの鳥居と言ひ、鎭守の森と言ひ、氏神の御社と言ひ、いづれも皆清淨簡素といふ事を尙んでゐます。其所にお參りいたしますと、私たちの心はおのづからすがすがしい、爽かな氣分になつてしまふのであります。殊に五十鈴川の清い流に、二千年の昔から鎭座ます皇大神宮に詣でますと、何人も西行法師と同じやうに、

なにごとのおはしますかは知らねども
かたじけなさに涙こぼるゝ

といふ感に打たれるのであります。この何とはなしに感じられる尊い心こそ、卽ち日本人の神に對するありのまゝの姿で、最も氣品の高い宗教的の情操であります。

持つてをります。

伏見桃山　京都市伏見區。明治天皇、昭憲皇太后の御陵のある地。

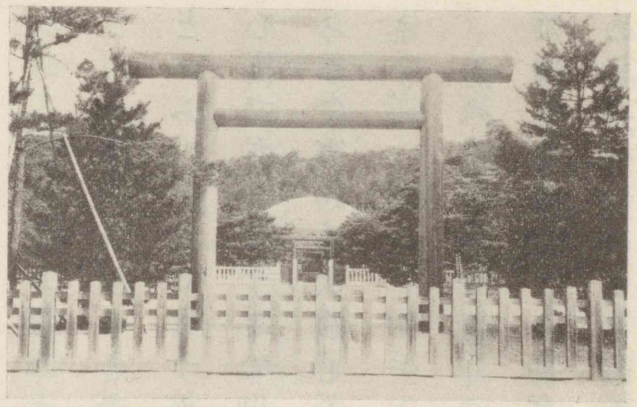
明治天皇の御製の中にも

淺みどり澄みわたりたる大空の
ひろきをおのが心ともがな

といふのがあります。この氣分を持つてゐるのが、大切な心掛であります。この御詠を拜誦いたしますと、いかにも清らかに爽かな大御心をしのび奉らざるを得ないのであります。

思へば、もう十數年の昔の事になりますが、私は明治天皇に因み奉る一つの挿話を持つてをります。それは明治天皇の御一年祭の行はれた時の事でした。或小さい田舍町の小學校の庭で、町民の遙拜式が行はれました。伏見桃山の方へ

向つて祭壇を設け、程よく隔たつた所に並びました老幼男女は、その町長をはじめとして、一同桃山の御陵を遙拜したのであります。その式に後れた町民は、いづれも靜かに榊葉の立つ祭壇の前に至つて、恭しく遙拜しては立去りましたが、その中に年の頃は五十歳くらゐの八百屋さんがありました。つゝましやかに祭壇の前に立つて伏拜みましたが、やがて徐に、左の小脇から綺麗に束ねた一束のしやうがを取出



桃山御陵

しやうが（生姜、生薑）

しまして、ていねいに祭壇に捧げて置いて、一歩退いて一禮して立去つたのであります。これを目擊しました私は、まことに涙ぐましい感に打たれたのであります。

皆さん、私たち日本人の心の底には、かういふ飾氣のない、單純であつて、しかも清らかな大和心がたゝへられてゐるのであります。私たちはこの心を日々の生活に移しまして、ものを清らかにし、心を爽かにして、僞らない、力强い社會を築いて行きたいものであります。私はこの爽かな心を基礎とした生活を、常に快活にして眞面目なる態度と申してをりますが、日本人の氣分と態度とは、どこまでも快活で眞面目なところに、一番よくその眞價を發揮するものがあると

信じます。

（ラヂオ講演集）

一〇　南京の壺

柴田鳩翁

柴田鳩翁。心學者。名は享。京都の人。天保十年（一八三九年）歿、年五十七。

さる御町内に婚禮ぶるまひがございました。なにが、お年寄をはじめ町役、家持の人々、一同に座に著きますと、さまざまな馳走がある。時にかの年寄は、酒と聞いては笹の露にも醉ふ程の下戸ぢや。座中を廻る盃の間、退屈さうにしてゐられると、亭主方が氣の毒に思ひ、「お年寄様は御酒は召上らず、御退屈にござりませう。ちとお菓子なりともお取り下されい。」と、南京の古染附の壺に大輪の金米糖を入れて、年寄の前へ持つて來る。座中も「これはよいお心附き、ひらにお菓子を

下戸　ぢや

ござりませう

召上られい

召上られい。」と勸めるので、年寄もわるうはなし、「然らば頂戴をいたしませう。」と、壺を引きあげ、手首をつゝこみしなに、少しきしむやうに覺えたが、無理に手を差入れて、つまみ出さうとするに、手首が詰まつて拔けませぬ。どうぞして拔けるかと、いろ〳〵にこじ廻して見ても、引つぱつて見ても拔けず、まご〳〵してをらるゝと、側から見附けて、「どうなされましたぞ。」「いや、手が少し詰まりまして、思ふやうに拔けませぬ。」と眞顏になつて言はるゝ。「それは氣の毒。私が壺を持つてをりませう。無理無體に手をお引きなされ。」と、一人が向ふへ廻つて、壺をつかまへ後へ引くと、年寄は手を前に引く。互にえいやと引合ふ有樣、景淸と美保谷がしころ曳きをするやう

つまみ出さうとする

まご〳〵してをらるゝと

お引きなされ

景清と美保谷云々　平家の侍大將惡七兵衞景清が屋島の合戰の時、源氏の士美保谷（箕尾谷）十郎國俊の兜のしころを引いて、これを引斷つた事をいふ。（鍾、錣）しころ

五人組　江戸時代の町人、百姓の組合で、五人で組織せしめ、幕府に對して警察上の共同責任を負はしめたもの。

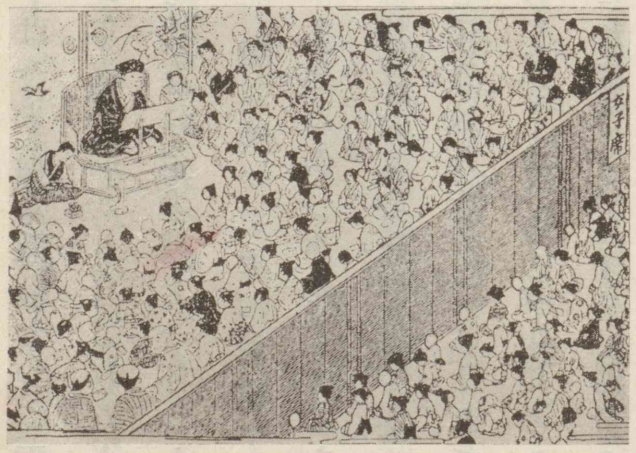
司馬溫公　名は光、支那宋代の名臣。

なと、座中一同にどつと笑へど、年寄はなか〳〵笑はず、泣顔になつて、「どうも、痛んで拔けませぬ。」といふ。さあ、これから大騒になり、「醫者殿を呼んで來い。難波骨接ではゆくまいか。」と、酒宴の興も醒めはてました。

柴田鳩翁

時に五人組が一人進み出で、「いづれもお騒ぎなされな。我等承つた事がある。昔司馬溫公といふ人幼き時、大勢の子供と共に、大きなる壺のほとりに遊びましたが、一人の子供、過つてかの壺の中へはまりました。大

勢の子供はこれを見て逃歸つたが、司馬溫公一人は歸らず、側なる手ごろの石を取つてかの壺へ投附けましたれば、壺は割れて、はまつた子供は不思議に命を助かりました。』と、ある人の話ぢや。今お年寄の御難澁は、この話によう似てある。いざや、我等が司馬溫公となつて、例へば、その古染附の壺が失禮ながら何程高金の品でも、お年寄の腕には換へられぬ。」と、しかつべらしく煙管をひつさげ、向ふ



心學講義

お助かりなされたか

賢いをつかみ

へ廻れば、年寄は氣の毒さうに、壺をかぶつた手を突出すと、たゞ一打に打碎いた。なにが、座中は金米糖が散らかつて、雪を降らしたやうになると、「やれお年寄、お助かりなされたか」。と、その手を見れば拔けぬこそ道理なれ、金米糖を一杯つかんでゐられたと申す事ぢや。

なんとをかしい話ではござりませぬか。つかんだものを放しさへすれば、自由自在に手は拔けたものを、一度つかんだら首がちぎれても放すまいと、片意地な生れつき、それで自由自在の大安樂が出來ぬのぢや。かく申せば、錢かねのことのやうなれど、つかむものはこればかりではない。器量のよいのをつかみ、賢いをつかみ、負惜しみをつかみ、家がらを

しかめる（顰）

したく（支度）

つかみ、身代のよいのをつかんで放すまいと擔ぎ歩くによつて、教を聞く事もならず、樂をする事もならず、愼みも出來ず詮方なさに癪氣抑へたり、顏しかめたり、酒飲んで紛らしたり、さりとては氣の毒なものでござります。壺割つてしまうてからは何言うても詮ないことぢや。身代の壺を割らぬさき、御用心が第一でござります。

それでも、我が本心は明らかな、明德は曇つてない、洗濯するには及ばぬと思ふ人があるものぢや。これを譬へて申しまするに、私のやうな盲が一人旅をして心安い旅籠屋に泊り、「明日の朝は七つ立ちをさせて下され」と賴む。亭主も心得、朝早う立たせまする時、盲は旅のしたくを整へ、杖を持つて

杖を持つて出ようとする
言はつしやる

出ようとすると、亭主が言ふには「まだ夜深いに、提燈をお持ちなされ、お貸し申しませう」。なんと言はつしやるやら。盲が提燈をもつて何にするもので。「いえ〳〵、お前にはいりますまいけれど、暗がりをとぼ〳〵お出でなさると、往來の人が行當りまする。それで提燈をお持ちなされいと申す事ぢや」。

どう盲ぢや

「成程さうぢや。私は行當らねども、えて目明きが突當る。さやうならお貸し下されい」。と、提燈をさげて道五六町出ましたところが、向ふから來る人が、盲にはたと突當りました。

そこで、大きに腹を立てて「おれに突當るやつは盲か」。向ふの人も癇癪に障り「おれは盲ではない。さういふおのれがどう盲ぢや」。「いえ〳〵、おれは盲ぢやけれども、人には突當らぬ。おのれが盲にきまつた」。向ふの人も愈〻腹立て「おれを盲といふ證據は、なんぞ覺えがあつて言ふのか」。「おゝ、覺えがある。おのれを盲と言ふ證據は、この持つてゐる提燈がおのれの目にはかゝらぬぢやないか」。と、ずつと差出す提燈の火は、宿屋を出た門口でとうに消えてしまうてある。

明らかなと思うてゐる

消えてはないか

なんと氣の毒な盲ではござりませぬか。火もともさぬ眞暗な提燈をさげて、これでも明らかなと思うてゐるのは、本心を見失うて、身勝手な心を本心ぢや、本心ぢやと思ひ、愼まうとも思はぬ人にようにに似たものでござります。どうぞお互に火は消えてはないかと、日々に吟味がいたしたいものでござります。

（鳩翁道話）

薄田泣菫
詩人、隨筆作家。名は淳介。明治十年岡山縣に生れた。

晴れきつた空
見かけると

叫んだものだが……

一一　小さい旅人

薄田泣菫

私たちが七つ八つの頃には、そろ〳〵秋が更けて來ると、晴れきつた空を毎日のやうに雁が渡つた。私たちはそれを見かけると、吹きさらしの野路に立つて空の一方を振仰ぎながら、

雁よ棹になれ
棹になつたら鉤になれ

と、その長い行列が漸次に雲の中ににじみこんでしまふまで、聲をからして叫んだものだ。が、何時の間にか雁も少くなつて、今では晝間その長い列が空を渡る事は、よく〳〵人氣

めつたに……ない

言はうやうのない

遠い野原かどこかでないと、めつたに見られなくなつた。

その頃はまた後の丘へ行つて見ると、葉の落ちかゝつた雜木林に、小鳥が澤山來てゐたものだ。小鳥と言ふと、私は海などを越えて來るあの小さい旅人のあわたゞしい旅を考へて、何時も、言はうやうのない寂しい旅心地を覺える。

百舌（鳥類寫生圖譜）

まづ百舌が來る。秋の彼岸が過ぎて、そろ〳〵日影が黃色がかつて來ようといふ頃、私たちはどうかすると、暖かい日

くぬぎ(櫟)
にれ(楡)
ひたき(鶲)
やつれる(窶)
……とでも
にら(韮)

の午過、そこらの木立で甲高い鋭いその聲を聞く事がある。「あゝ、もう秋だな。」と、思はず振返つて見ると、矮小なくぬぎにまじつて、ずばぬけて背の高いにれの木に百舌が一羽とまつて、黄色い夕陽を受けて、羽が金のやうにきら〳〵してゐるのが見える。私たちはその瞬間言はうやうのない強い、健かな氣持が胸に流れるのを覺える。

次にはひたきが來る。山家の午過、だるさうなきり〴〵すの聲も何時の間にか止んで、枯葉一つ寢返を打つ音までがはつきりと耳に入る靜けさの底に、どこやらやつれた人の溜息とでも言つたやうな微かな聲がもれて來て、何の音ともわからない。すると樹蔭のにら畑か何所かで、餘念もなく

……と言つたら
とまるなり
さゝやく(囁)

せつせと仕事に精出してゐた農夫が、ひよいと顔を擧げる拍子に、すぐ鼻先の小枝から枯葉のやうに小鳥がついと身をそらして、逃げて行つてしまふ。それがひたきだ。

ひたきと言つたらまるで悲哀を抱いてゐる人のやうに、大抵は連に離れて、たゞ獨りで出て來る。そしてそこらの小枝にとまるなり、何か眼に見えぬ昔馴染でも招くやうに、ひよくり、ひよくりと輕いお辭儀をして、さゝやくやうな聲で歌ひ出す。私はそれを見ると、人の爲、世の中の爲と言つたやうなわけでな

きたひ

く、自分一人の爲に歌つて、それで滿足してゐる人たちを思ひ出さずにはゐられない。

ひたきが來てものの十日と經たぬ間に、四十雀が來る。この鳥はひたきと違つて、十羽も二十羽も群を組んで來る。山から里へ移るをりなどには、まるで時雨でもするやうに、細かい羽音がさつと空を掠めて聞える。

四十雀（鳥類寫生圖譜）

そしてそこらの木立におりるなり、眩しい程すばしこく、雀のたごなどを啄き廻しながら、鼠色の背をそらし、柔かみの

まるで……のやうに

ある圓い胸を見せて、透徹つた銀の鈴を振るやうな聲で、早口にしやべり續ける。で、かうした大層な群の中には、きつとまだ羽の伸びきらない灰色の產毛そのまゝの雛兒がまじつてゐて、どうかすると高い枝にとまり損ねて、もんどりうつて宙に返る事もあるが、そこはまた馴れたもので、いきなりひよいと下枝につかまつて、ませた身振で、樹肌のひゞを啄いたりする。まるで山家そだちのすばしこい、きさくな魂そのものを見るやうな氣持がする。

みそさゞい（同上）

で……

……たりする

ひゞ（罅）

みそさゞい（鷦鷯）

こたつ（火燵、炬燵）

聽取れようはず

小雪がちらつく頃になると、みそさゞいが來る。これはひたきと同じやうに、大抵獨法師で、それもこつそりと附近を忍ぶやうにして來る。冬の初の午過山近い田舍の小家で、爺さんはこたつにもぐりこんで、こくり〳〵と居眠をする。その傍で婆さんはせつせと絲車を繰つてゐる。煤けた障子に、檐につるした干菜の影が見すぼらしく映つて、時をりちつぽけな小鳥の影がちらついたりする。どうかして絲目が切れて、睡さうな錘（つむ）の音がぱつたり止むと、こそ〳〵と掛菜をむしる音がするが、老人の耳にそんな音の聽取れようはずがない。婆さんは俯（うつむ）いたまゝ、また絲を紡ぎにかゝる。さうかうする間に、鳥は舌打をするやうな聲を立てながら、ひよい

冷い雨の

ひよいと小刻みに籬を傳はつて、隣から隣へと、狹苦しいもの蔭を出たりはいつたりして移つて行くのだ。それがみそさゞいである。

頰白（鳥類寫生圖譜）

みそさゞいと後先になつて頰白が來る。冷い雨のびしよ〳〵と降る中を、獨者の頰白が灰色の胸までぐしよぬれになつて、しよんぼりとそこらの木にとまつてゐるのを見ると、私の國でこの鳥の鳴聲を解いて、

一筆啓上つかまつる。

子供泣かすな火の用心。
今度の便りに金十兩、
やりたいけれど、一文もござなく候。

と言傳へるのを思ひ出して、しみ〴〵世渡のむづかしさと、旅心の寂しさとを思はずにはゐられない。

後の雜木林にこんな小鳥が來る頃になると、野にはもうそろ〳〵うづらが來、しぎが來る。

うづら（鶉）
しぎ（鴫）

島木赤彦　歌人。本姓名は久保田俊彦。長野縣の人。大正十五年歿、年五十一。

八ヶ嶽　諏訪湖の東方。山梨縣に跨る。最高峯赤嶽は海拔二八九メートル。

一二　諏訪湖畔の冬

島木赤彦

富士火山脈が信濃に入つて八ヶ嶽となり、立科山となり、霧ヶ峯となり、その末端が大小の丘陵となつて諏訪湖へ落ちる。

その傾斜の最も低い所に私の村落がある。傾斜地であるから、家々石垣を築き、わづかに地をならして宅地とする。最高所の家は丘陵の上にあり、最低所の家は湖水に沿ひ、その間の傾斜地に、百戸足らずの民家が散在してゐる。

山から丘陵、丘陵から村落へ續く木立が、皆落葉樹であるから、冬に入ると傾斜の全面が皆あらはになつて、湖水から反射する夕日の光が、この村落を明るく寒くする。寒さが追追に加つて、十二月の末になると、湖水は全く氷結する。

湖水と言つても、海面から七百六十メートルの高所にあり、村落はその湖水よりもなほ高い丘上にあるのであるから、嚴冬の寒さは非常である。朝、戸外に出れば、ひげの凍るの

立科山　八ヶ嶽の北、諏訪湖の東北。海拔二五三〇メートル。

諏訪湖　長野縣諏訪郡の殆ど中央に位する。稍梯形で廣さ一四・五方キロメートル。

私の村　長野縣諏訪郡豐平村。

明るく寒くする

ひげ（髭、鬚）

凍著を覺える事すらある

は勿論であるが、時によると、上下睫毛の凍著を覺える事すらある。かやうな時は、顏の皮膚面に響き且裂けるが如き寒さを感ずる。

…響が…聞えて來る

この頃、私の村では毎朝未明から、かあん、かあんといふ響が湖水の面から聞えて來る。これは、人々が氷の上に出て「たたき」といふ漁をするのである。長柄の木槌で氷をたゝきながら、十數人の男が一列横隊を作つて向ふへ進む。槌の響で湖底の魚が前方へ逃げるのを、だん〳〵追詰めて、豫め張つてある網にかゝらせるのが「たゝき」の漁法である。私の家は村の最高所にあり、庭下の坂がすぐ湖水に落ちてゐるので、一列の人々を見るには、かなり俯目にならねばならぬ。俯目

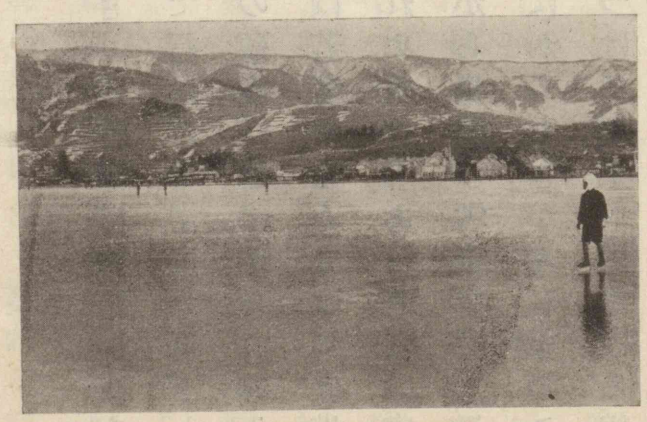
…男が…進む

…かゝらせるのが…漁法である

…手つきまで…見える

になつた視線が、氷上の人まで達する距離はかなりあるのであるが、氷上の人の槌を揮ふ手つきまで明瞭に見える。氷を打つ槌先が視覺に達する時、槌の音はまだ聽覺に達しない。次の槌を振上げる頃に漸く前の槌音が聞える。それで槌の運動と音とが交錯して、目と耳とへ來るのである。目に來るものも、耳に來るものも、微に徹して明瞭である。單にそればかりでない。一列の人々の話聲までも、手に取るやうに聞え

…運動と音とが…目と耳とへ來る



冬の諏訪湖

これは……勞作である

る。空氣が澄んでゐる上に、村が極めて閑靜であるからである。

氷きり

氷きりの作業は、快晴の夜を選んで行はれる。溫度が低下して、氷の硬度が增すからである。これは若者でなくては到底堪へられぬ勞作である。若者は、宵の口から稾製の雪沓をはき、その下にかつちき（かんじきのこと）をつけて湖上へ出かける。綿入を何枚も重ねた上に、厚い半纏を纏ふので、體はいはゆる

はさみ（鋏）

降る如く

著ぶくれになつて、横も竪も同じに見えるといふ姿である。かやうな扮裝（いでたち）をした若者が、氷の上に一列に並んで、氷を鋸びきにひき始める。氷をひく手元は、初め暗くて後に明るい。氷に眼が馴れるのである。三尺四方程の大きさにひき離される氷の各片が、切離されると共に水中に陷る。それが氷ばさみといふ大きなはさみで挾み上げられる。挾み上げられた後の水には星が映つて、搖れてゐる。大凡一望平坦な氷原にあつて、空は手の屆くやうな低さを感ずる。星が降る如く光り滿ちてゐるのである。星の光は水にあつて水の明りとなり、氷にあつて氷の明りとなり、その明りに全く馴れるに及んで、相隣する人の顏まで明瞭に見えるやうになる。夜が

……するのが……なるのである

……者もあるがそれも……

漸く更けて寒さが益〻加ると氷原の諸所に龜裂の音が起る。寒さの爲に氷が收縮するのである。それが氷原を越えて四周の陸地山地まで響き渡る。その響の下に立つて鋸をひいてゐる若者の背中には汗が流れ、暫く立つて休息してゐると、その汗が背に凍り著くのを覺える。さういふ時には、鋸の手を休めないやうにするのが唯一防寒の手段になるのである。それ故若者はたゞせつせと切る。腕が疲れると唄も出ない。たゞ時々睡氣ざましに大きな聲を張上げる者もあるが、それも永くは續かない。餘り疲れて寒くなれば、氷の上で焚火をする事もある。かやうにして夜が白んで來ると、積まれた氷板が山の如く累り、それが夜明から運んで、湖岸の田

それが……積上げられる

……氷板が……觀を呈する

……槌の音は……響であり

圃に積上げられるので、田圃には連夜切上げられた氷板が、長い距離に亙つて正しく積並べられて、恰も氷の壘壁を築いた如き觀を呈する。積まれた氷には多く筵類をかぶせて置くが、覆がなくとも、白晝の日光で溶けるやうな事はない。海拔七百六十メートルの地のいかに寒いかは、これで想像し得られるであらう。

島木赤彦

私の村はまた夜になると、所々の家から藁を打つ槌の響が聞える。氷きりなどに行かぬ人々が、草鞋や雪沓を造るのである。ひつそりとした夜の村に響く槌の音は、鈍くて重く

て底のない響であり、聞いてゐればゐる程、もの遠い感じがする。氷たゝきの槌の音は遠くて近く聞える。櫓を打つ槌の音は、近くて遠い感じがする。響くところは相反するけれども、靜寂に歸するに於て一である。

一三　埠頭

長田幹彦

長田幹彦　小説家。明治二十年東京市に生れた。本文は特に本書の爲に改作したもの。

投出された揚荷

灰銀と濃綠との緩やかな諧調――そんな事を考へながら、私は岩壁の突端に無造作に投出された揚荷の上へ腰をかけて、あてどもなく港内を眺め廻してゐた。

雲の多い十二月の寒空からは、午後三時頃の陽光がをりをり臆病らしくうつすりと射しよどんで、防波堤と標識燈とで區切られた港の海面は、あきらめ顔にどろんとした表情を浮べてゐる。

煙突から吐出される煤煙

白い船、黑い船は壓倒的なトン數を爭ふやうにその上に立重なつて、方々の煙突から吐出される煤煙は濛々とひつきりなしにはひかゝつて來る。何所を見ても、鋼鐵が水に浮んでゐる鈍重な氣分が溢れてゐる。重工業と產業との露骨な鬪だ。

繫船岸の方で鈍い起重機が喘ぐと、大きな貨物が空中を魔術のやうに動いて行く。

何所かで

何所かで鐵板が墜落したやうなどよみが緩漫な律を刻んで、重苦しく響いて來たが、それは彼方の造船所で水壓の

さういつた轟音

……たりしながら

かもめ（鷗）

ハンマーを使つてゐる音らしい。鋭いサイレンの絶叫、ほえるやうな汽笛のうめき、岸壁を洗ふ引波の音、人の呼聲、馬のいなゝくやうなチェーンのきしり、さういつた轟音は一瞬一瞬に生れては消え行く情調を形づくり、解けたり、もつれたり、また或時は互に相響鳴して、ドームに鳴り渡る管絃樂のやうにめまぐるしく渦卷いたりしながら、物凄い近代生活の狂噪曲をかなでて行く。

潮氣を含んだ風の歎息が忍び寄るやうにそよ〳〵と息づいた。

白いかもめが四五羽、高く低く飛交ひながら、汽船のまはりで餌をあさつてゐる。かもめがさつと水面を掠めると、船

見ると

の影や、塵芥や、ぎら〳〵七彩にゆらめく油の斑紋がにいつと笑ふ。向岸の倉庫の列も紅く笑つた。

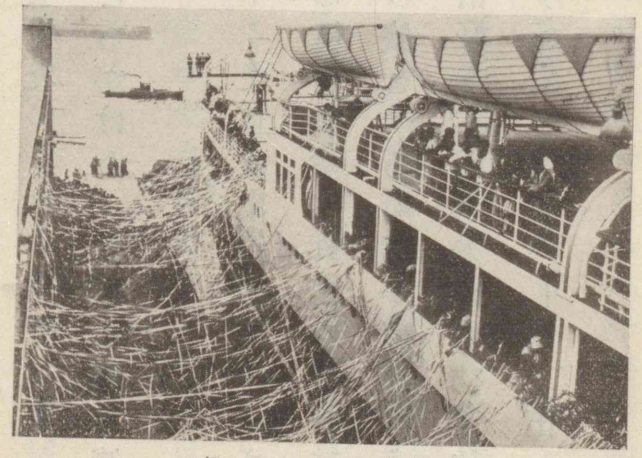
だしぬけに出帆を知らせるどらがけたゝましく鳴り渡つた。

見ると、岸壁の裏側では、山のやうな巨大な汽船が、今まさにタラップをはづさうとしてゐる。眞白に塗られた中甲板にも、船橋の下の所にも、遠い海路の旅をする船客が眞黑にうち群れてゐる。その間を身輕な恰好をした水夫が右往左往に馳違つて、ロープを曳いたり、デッキ・バーをおろしたり、忙しさうに立働いてゐる。

船橋の端に立つた赭顔の背の高い船員が太い聲で何か

どなると、それに應じて彼方でも此方でも勢のいゝ懸聲が起つて、鎖のすれ合ふ音や、物をころがすやうな音が船首から船尾の方まで響きあがつて、やがて怪物のやうな船腹は徐々と岸壁を離れる。

サイレンが港中にこだまを呼びながら一聲長くうなり出す。續いてまた一聲、それを追ふやうに甲板では奏樂の音が起る。この港にしばしの別離を告げる「オールド・ラング・ザイン」



出帆

こだま（谺）

ふるへながら

の曲だ。

船腹からは眞白な蒸氣が濛々と吐出されて、汽船は小刻みにぶる〳〵ふるへながら、曳船に曳かれて柔かに滑り出した。

甲板に群がる船客と岸壁の上屋の上で見送る群集との間では、さま〴〵な最後の別離の言葉が取交される。帽子や手帛がひら〳〵海の風に飜る。中でも一番美しいのは、網のやうにからまる五色のテープであつた。五彩にもつれる細い紙の紐は、見送る人と見送られる人との悲しみや、心のときめきを繫ぐたゞ一條のか弱い繫がりであつた。やがてその繫がりもはかなく切れて、テープは煙花（はなび）のやうに亂れな

がら海の中へ落ちて行つてしまつた。

汽船は油のやうに靜まり返つた海面を裂いてだん〳〵と遠ざかる。

今まで欄干によつて人目も恥ぢずに泣崩れてゐた女の顏もぼんやり霞んで「オールド・ラング・ザイン」の曲の最後の繰返しだけが悲しく、ちぎれ〳〵に聞えて來る。それは見送る人々の心に、別離の悲しみを一層深く刻みつけるやうに、何時までも何時までも意地惡く海上にたゆたつてゐるのであつた。

たゆたつてゐる

久能山東照宮
靜岡縣安倍郡久能山上にある。別格官幣社。德川家康を祀る。

醫する事を得た

一四　久能山東照宮

幾回となく東海道を往復したにも拘らず、久能山へはまだ一度も參詣する機會を得なかつた。暮も押詰つた一日、靜岡の旅寓からわづか三時間の少閑を利用して登山、年來の渴望を醫する事を得た。午前八時、東道の森本氏と車を列ねて鐵道の踏切を横ぎる。夜來の雨は霽れたが、斷雲はまだ空に飛んでゐる。日の光はきら〳〵と射出て、冬の朝とは思はれぬ暖かさ。富士は山腹以上なほ雲に包まれてゐる。だんだんお山が見えて來たぞ」と、車夫は前後相呼應して走る。雨後のぬかるみはあるが、全體としては良い道である。一面の冬田、見るもののない中に梨木棚も冬枯れてゐる。これに反し

て、家々の後園に累々として金色を輝かしたオレンヂの見事さは、行く所に富貴の色を漂はしてゐる。わづか數尺の樹に直徑二三寸もある柑實が二十も三十も實のつて、それが幾十株となく立並んでゐる所もある。何所にも豐かな天然の惠の色がみなぎつてゐる。かういふ賑やかな冬景色は、北國は勿論、東京の近傍でも決して見られぬ眺である。柑橘の類ばかりでなく、畑には葱が高く茂つてをり、大根は半分以上青い肌を挺出して、右に左に傾き合つてゐる。すべて物資の饒かな感じが浮ぶ。既に收穫された大根は納家や母家の軒下、または壁をめぐつて干しつるされてある。

道に出逢ふ人は十人が九人まで女である。娘もあれば婆

金色を輝かした
漂はしてゐる
みなぎる（漲）
干しつるされてある
娘もあれば……

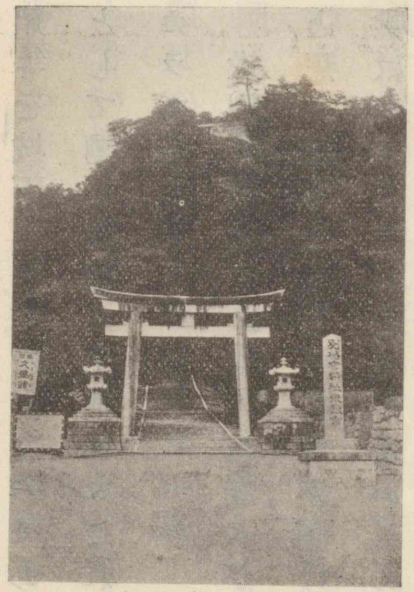
さんもあり、中年輩の者もある。三々五々、或は荷車を曳き、或は籠を負ひ、或は天秤棒を肩にして陸續として來る。野菜、魚類等を城下へ賣りに出るのである。黎明から起出でて、營々として働く農民の生活、あゝこれこそ眞に國家のオホミタカラである。

緣側で網をすいてゐる老人がゐるので、最早海が近いなと思ふ程もなく、右手に海が開けて見える。廣々とした海の眺は何時見ても心地がよい。このあたり、殆ど波打際近くまで畑になつてゐる。砂地のやうで、しかも眞黑な土である。數百年來耕しに耕して、海濱の砂地も何時しかりつぱな畑地になつたのであらう。ゑんどう畠に花が咲いて、莢が實のつ

耕しに耕して
ゑんどう（豌豆）

てゐるのにも驚かされた。「このゑんどうが東京へ出るのです」と、車夫は自慢顔に語る。

久能山下の一旅舍に小憩する。その家の小童は余が外套を手にして案内する。之の字の形に左右に曲折する石磴は十七折、一千三十六段といふ。傾斜が割合に緩いので、思つた程には苦しくない。それでも八折九折すると大分汗ばんで、息がはずんで來る。曲り角のベンチに腰かけて、且は憩ひ、且は眺望を恣にする。上れ



久能山

且は……且は……

山本勘助　戰國時代の武將。軍略に長じ武田信玄に仕へた。永祿四年（一二二一年）歿、年六十九。

ば上る程、景色は愈〻開けて、下の民家は益〻小さく見える。大名屋敷の番所のやうな所を通つて稍少し上ると、右手に平地がある。此所に山本勘助が掘つたといふ勘助井がある。深さが十八丈とか書いてあつた。こんな高い所によく掘つたものだと感心する。森本氏が骨を折つて汲上げられた一釣瓶の水に口漱ぎ、手洗ふ。日露戰爭戰利品の記念物などを見て行くと、左手に社務所がある。禰宜の案内

久能山東照宮

によつて、しばし其所に休憩する。額に慶喜、家達兩公の肖像畫があつて、柱隱しもすべて葵の紋所、床の間に大日本史の書函が積んであるのも何となくふさはしい。此所からの海上の眺はちやうど繪に畫いた石山寺のやう、しかしそれに比して規模の大きいのは言ふまでもない。月の夜の美しさは思ひ遣られる。社務所にも井があつたが、これは何時誰が掘つたものか、勘助よりも偉い人があると感じたばかり、その由來は聞きもしなかつた。

慶喜　德川慶喜。江戸幕府第十五代の將軍。慶應三年大政を奉還し、明治三十五年公爵を授けられた。大正二年歿、年七十七。

家達　公爵。德川慶賴の三子。文久三年（一八六三年）生。

大日本史　德川光圀の撰。四百三卷。古代から吉野朝時代までの漢文の國史。

石山寺　滋賀縣大津市石山にある眞言宗の寺。

聞きもしなかつた　イスパニヤ（西班牙）

禰宜の案内で樓門を入り、まづ寶庫を拜觀する。第一に目に著くのがイスパニヤ製の時計である。また硝子の藥瓶、これ等は家康の遺品で、當時の外國物でいかばかり珍重せら

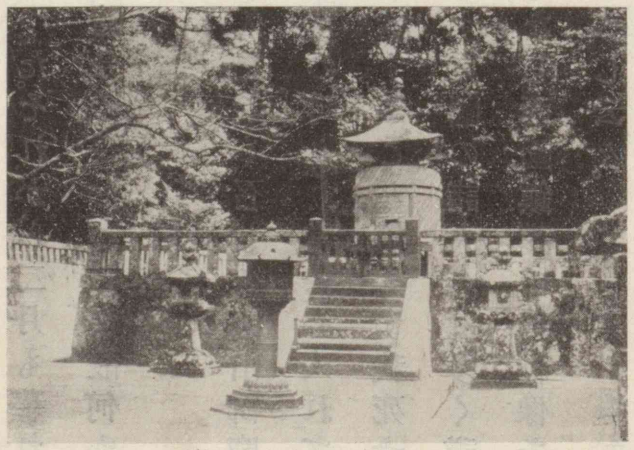
思ひ遣られる

元和二年　第百八代後水尾天皇の御代。二二七六年。

駿府　今の靜岡市。

れたかゞ思ひ遣られる。德川將軍初代から第十五代慶喜公までの鎧が順序よく列べられてあるのは、今日よりも寧ろ今後數百年の後からは、更に多大の興味を以て見られるものであらう。

本殿に參拜、御神酒を戴く。やがて殿堂の後方の寶塔を拜す。これが卽ち我が歷史の大立者たる德川家康埋骨の地である。家康の病にかゝつたのは元和二年正月二十一日、駿府から



久能山家康廟

田中　今の靜岡縣志太郡西益津村。

不例とあつて

榊原照久　家康の近侍。久能城主。正保三年（二三〇六年）歿、年六十四。

命ぜられ

死すとも

祭主たるべし

出て田中に鷹狩の最中俄に不例とあつて、二十三日までは田中に滯在、二十四日に駿府に歸つた。それから二月も暮れ、三月も過ぎて、四月十七日に薨去、隨分の長わづらひ故何から何まで遺憾なく遺言した。

大御所御病床に榊原大內記照久を近く召し、久能山御廟地の事つばらに命ぜられ、汝幼童の時より常に心入れて怠らず近侍し、且魚菜の新物を獻ずること絕えず。我死すとも、汝が祭奠を快く受けんとす。東國の諸大名は多く譜代の族なれば、心置かるゝ事もなし。西國鎭護の爲、神像を西に面して安置し、汝祭主たるべし云々。

この遺言によつて同十九日、駿府から此所に葬り、榊原照久の子孫世々これを守つたのであつた。これで見ると、家康は早くからこの形勝の雄偉且壯麗な場所を見立てて、自分の廟所としたのである。豐臣氏の亡びたのはその前年卽ち元和元年の夏で、家康は最早心置きなく死ぬ事が出來たのである。しかもまだ心がかりなのは西國の諸大名、それ故西國鎭護の爲、神像を西に面して安置せよと遺言したのである。どこから見ても家康式である。

亡びたのは

絕景なるものを

さこそ

禰宜に別れて山を下る。

あいにく曇りがちの空で、海上は晴れやかでない。何時もならば伊勢、伊豆の岬端を左右に見て絕景なるものをと、森本氏の言はれるのを、さこそと頷く。歸つてもとの旅舍に憩

有渡の濱　靜岡縣安倍郡有渡山の麓、久能村一帶の海岸。

さぞかし

葛原𪜈　詩人、教育家。明治十八年廣島縣に生れた。

へばまさに十時。

靜岡はよい都會である。久能山一帶の海岸有渡の濱のあたり、風光明媚、羽衣傳說のあるのも無理はない。まことによい所である。この所に老を養ひ、この地に骨を埋めた古英雄の快心はさぞかしと思はれる。

一五　たき火（童謠）

葛原𪜈

一　たき火

はいて集めた落葉のお山、
もえるよ、もえるよ、
日くれ方。

たき火　青柳喜美子筆

もえる火の手で、垣根にうつる、
あのかげ、そのかげ、
誰のかげ。

一つ殘つてる梢の木の葉、
あがる煙に
ゆれてゐる。

少しつめたいみんなの背中、
たき火かこんだ
あかい頬。

川路柳虹
詩人、美術評論家。名は誠。明治二十一年東京市に生れた。

二　寒雀

雪のふる日に
でんせんに、
かるくとまつた
寒雀。

ふつくら外套
身につけて、
はりがねのうへ
ちよんと鳴く。

粉雪、玉雪、

川路柳虹

服部躬治
歌人。福島縣の人。大正十四年歿、年五十一。

上野の鐘
東京市下谷區上野公園にある時の鐘。

さえて聞ゆ

ぼたん雪。
なにがたのしい
寒雀。

一六　師走日記

服部躬治

十二月七日　水曜　朝晴れて寒し。父上お胴著を召す。えらがりの眞ちやんまでも、今日はさすがに足袋をはく。學校よりすぐに琴のお稽古に廻る。「葵の上」あがる。歸る頃に風吹出し、だん〳〵ひどくなりて、暮るゝまで止まず。夜、上野の鐘さえて聞ゆ。

八日　木曜　飛石に薄霜置き、南天の枝に見も知らぬ小

小鳥ゐたり

……見ゆ

なほりしにして

鳥ゐたり。冬牡丹一つ咲く。西澤さんに拜借せし北極奇聞を返す。夕燒の空に、七八日ぶりの富士山鮮かに見ゆ、風呂場よりも、二階よりも。

九日　金曜　風寒し。手水鉢に薄き氷見ゆ。今日始めて襟卷す。兄樣に肘突頼まる。母上に端切もらつて、序に自分のも一つ縫ふ。眞ちやん少し風ひく。わざと髪を刈り來て「もうなほつた、なほつた」と言ひ〳〵、一人にてなほりしにしてしまひぬ。

十日　土曜　朝、曇を氣遣ひながら學校へ行く。二時間目に風、三時間目より雨。神戸の姉樣より小包にてお歳暮屆く。何時になく早し。返事母上に代りて書く。

寒けれど

片附く

役に立ちさうなるもの

小包只今をりからの雨の中に到著致し候。風は寒けれども、御心入の暖かなるお祝物、まことに嬉しく存じ候。御主人へ宜しく。こなたよりはまた改めて。匆々。

うつかりと我が名を書きて、出したる後にて氣が附きたり。「御主人へ宜しく」は、どう考へてもをかし。雨、風をおびて、日暮るゝ事あわたゞし。

十一日　日曜　曇　母上春著の見つもりし給ふ。お手傳して、洗物、張物などの部分けをなす。疊屋に催促の使を出す。午後、文庫の中を片附く。大抵は反古なり。役に立ちさうなるものはほんの少しばかり。何となく心細し。

十二日　月曜　冷え〳〵と空晴れたり。霜柱立つ。父上の

お書齋に石油ストーブ据附く。夕方微震。

十三日　火曜　疊がへ。空風めきて、日かげ照り曇る。夜、父上の靴下編む。

十四日　水曜　晴れて暖かなり。髪洗ふ。庭松の梢に、どこの兒の紙鳶か引つかゝりて、夕近くまで離れず。兄様やつとの思して取らる。町田の叔父様より、御旅行にお立ちの由葉書來る。冬牡丹また一つ咲きたり。

十五日　木曜　晴　疊がへ終る。大工來て、あちらこちら繕ふ。母上の買物に日本橋へ行き、序に新暦を買ひて歸る。兄様と眞ちやんと、裏庭にて落葉を焚く。煙面白く立昇る。

十六日　金曜　今日も晴　學校より歸りて洗物少しす。

取らる

洗物少しす

杉垣の向ふに隣の山茶花の花白く見えて、落水の音いと靜かなり。母上重詰、お雜煮などの獻立し、帳面に書附け給ふ。「口取には是非梅花玉子を」と差出口して、ためしに今日料理してみる。白身が梅の花瓣、黄身が心。少し大き過ぎ柔か過ぎたれど、見る目とにかく美しとて、母上にほめらる。「お蔭で夕飯が遲くなつた」と、兄様例の憎まれ口に卻つて誰よりも多く召上る。

十七日　土曜　朝霜日に輝きて白し。うがひの水何時もより齒にしむ。少し後れて琴のお稽古に行く。先生もお風氣なり。夜、犬頻りにほえておそろし。遠き半鐘聞ゆ。

十八日　日曜　寒けれど晴、心地よし。深井さんにお能見

柔か過ぎたれど

召上る

うがひ（含嗽）

齒にしむ

ほえる（吠）

歸京せられし由
おつしやる
つぼみ（蕾、莟）

に誘はれたるをことわり、家にゐて、いろ〳〵母上の御用を足す。父上にお客多く、目の廻るやうにて夜になりぬ。

十九日　月曜　曇　雨少し降る。町田の叔父様昨日歸京せられし由にて、お出でになる。お土産に米澤紬一反戴く。

二十日　火曜　晴れたる空に風高く吹きて、後れ渡る雁がね聞ゆ。母上お歳暮、お年玉の配り當し給ふ。側にゐて品數、家數など、おつしやる通りを勝手用の手帳に書附く。カメリヤのつぼみ、今日やつと破れかけたり。植鐵より梅の盆栽屆く。下駄、手袋買ふ。來年の日記帳も買ふ。

（姉　妹）

迎へる
……するので
……望まれぬ

一七　新　年

暦の改まると共に、人は一歳づつ年を取るのであるが、實際は、そのたびに生れ變つて、若くなるのである。新しい年を迎へるには新しい希望を以てするので、今年こそはと奮發するから、事業に對しての勇氣も生ずるのである。過去を顧みれば、人の行爲には缺點もあり、失策もある。それを何時までもくよ〳〵してゐては、前途の發展は望まれぬ。過去は水に流して、行く手に光明を求めるのが、處世の良法である。そしてそれの好機、卽ち年の改まる日である。

我が國には、昔から大祓といふ祭式によつて、過去のあらゆる罪を一掃し、汚れた心をうち棄てて復活するといふ風

復活し來つた

異なる

習がある。これは六月と十二月との二度行はれたもので、卽ち我が國民は、一年に二回づつ心身共に新たになつて、復活し來つたのである。この大祓の式は今でも行はれてゐる。就中十二月は、年も新たになる前であるから、この復活の儀式が盛大に、且嚴格に行はれるのである。

そこで我等は新年を迎へる用意としては、身分相應に、出來るだけ一切のものを新たにし、淸くして、形の上にもこの復活の義を表す事に努めるのである。春秋に富む壯者は勿論、還曆に入り、古稀に達する老人でも、その生れ變る心持には異なるところがない。

正月の儀式は、太古の質素簡朴の風を傳へて、今日に至つたものである。注連繩や、ゆづり葉や、白木の三方や、土器や、昔ながらの祖先以來の風を繼承して、毎年繰返して行くところに妙味がある。卽ち年々生れ變ると同時に、年々昔を憶ひ出して行くのである。祖先から傳はつた掛物を掛けたり、古い道具を出したりして、遠い昔を憶ひ出すのである。

昔ながらの

……て行く

行はせられ

我が國民の宗家と仰がれ給ふ皇室に於ては、我等が一家に於て家の祖先を祀ると同樣に、新年には四方拜や元始祭を行はせられ、また內外臣僚を召させ給ひて拜賀を受けさせられ、御宴を賜ひなどし給ふのである。これを思へば、我等は今の世ながら直ちに太古肇國の昔を憶ひ起さずにはをられぬ。

橘曙覽　江戸時代末期の歌人。越前の人。明治元年（二五二八年）歿、年五十七。

元朝や云々　室町時代の俳人荒木田守武の作。

余は橘曙覽の
春にあけてまづ見るふみも天地の
はじめの時とよみ出づるかな

といふ歌を、早くから深く感心してゐた。これ、かの元朝や神代のこともおもはるゝと同一の思想であつて、日本人の心には、元旦と神代とは離れぬのである。

自修文

緣起の話

緣起といふ詞に二つの意味がある。その一つは、神社佛閣の緣起などといふ緣起で、讀んで字の如く事物の緣つて起るところ

原始　はじめ。
佛典　佛教の書物。
世俗に　世の中で俗に。
嘉瑞、吉兆　共にめでたいきざし。
卑近　手近なわかりやすいこと。
そば（蕎麥）

即ち原始の義。もとは佛典から出た熟語だと言ふ。今一つは、世俗に「緣起がよい、わるい。」また「緣起を祝ふ。」などと言ふ時の緣起で、前に言つた神社佛閣の緣起とは全く違ふ。勿論右の意味が一轉したのではあるが、人の行末、また事業の成功をその初に祝ふのを、「緣起を祝ふ。」と言つたので、再轉しては、「緣起」とばかり言つて、嘉瑞とか吉兆とかいふ意義にもなつたのである。その場合、後世は「緣喜」と文字を書替へても通じてゐる。左に一二卑近な實例を擧げて說明しよう。

東京では大晦日に「晦日そば」と言つて、そばを食べる。何故大晦日にそばを食べるかといふに、そばは長く伸びる物故、身代の伸びるのを祝ふのである。また東京の風俗で、轉居する時「引越そば」と稱して、新居の四隣へそばを配る事のあるのも、やはり細く長く交際の出來るやうにといつて、緣起を祝ふのである。

上方　京都大阪地方のこと。もと京都に皇居があつたので言つたもの。
なぞ（謎）
容器　いれもの。
亡者　なくなつた人。
分類　種類によつて分けること。
孝德天皇　第三十六代。

また大阪で附木を配るのも、やはり上方の縁起を祝ふ風俗である。附木は薄い板の先に硫黄が附いてゐる。昔は竹の先へも硫黄を附けたもので、これをたゞ「硫黄」とばかりも稱してゐた。そこでこの附木を配るのは、「先祝ふ」といふなぞで、やはり縁起を祝つてゐるのである。餘所から祝儀の赤飯などをもらふ。その容器の重箱には、どこでも南天の葉を敷く。南天を「難轉」の語に響かせて、災難を轉ずる心だといふ。その重箱をあけて中に附木を入れて返すのも、また「先祝ふ」といふ心の縁起である。

また江戸時代に、女子が「おいはひ」と假名で書く場合には、「おいわひ」と書いたが、これもいはひでは、亡者の位牌と同じ言葉に聞えるのを忌んだのである。以上のやうな事を分類してみると、凡そ四種類程になる。

まづ支那の眞似をしたものから言ふと、孝德天皇の御代に、長

筆洋天田太　現出鳳白

門國から白雉を獻上した。これは嘉瑞吉兆であるといふので、年號を白雉と改めた。これが日本で緣起を祝つた初であらう。またこの頃白鳳が現れたといふので、白鳳といふ私年號も出來た。鶴龜だの、松竹梅だのをおめでたい物にしたのも、支那から傳はつた風俗である。

次に日本の創意に移つて、おめでたい意味に聞える言葉でものを祝つた例を擧げると、正月の餅は昔から祖先のお祭に用ひた物であるが、これに附屬した品物は、殘らずおめでたい意味をもつてゐる。まづお供餅の下に敷く裏白は、深山にあつて、霜雪に凋まないめでたい草で、その上、漢名を齒朶と言ふ。齒は齡と讀み、朶は枝で、命長く延びる枝といふ事である。まただい〳〵と讓葉とは、親子代々讓り受けて、子孫長く繁昌する意味である。武家の時代には、出陣といふと、うちあはびと、かち栗と、昆布とを三方に

私年號　朝廷で制定せられたのでなくて、民間で私に稱へた年號。

創意　始めて工夫した事。新たにし出した事。

出陣　いくさに出ること。

うちあはび（鮑）　あはびの肉を薄くへがし、のばして乾かしたもの。のしあはびともいふ。

かち（搗）栗　栗を十分乾かして火であぶり、臼でついて殼と皮とを取去つたもの。

載せ、これを肴にして祝盃をあげる。これは打つて勝つてよろ昆布といふ意味に寄せて祝つたのである。鰹節を祝物に使ふのも、もとは勝武士の意味であつたが、今では何の意味もなしに、たゞおめでたく使はれてゐる。

それから事物におめでたい名を附けて祝ふといふのは、子供の名に長松、鶴太郎、お龜、お千代などと附けるのは、長命を望む心であり、男兒の祝著に翁格子を染めるのも、翁といふ緣起である。また不吉を忌み避ける著しい例は、死といふ音に通ずるといふので四の字を忌み、四十二歳の二歳兒は、四二(しに)とも、四四(しし)ともなるから、一旦捨てて、更に拾つて育てるといふ風習。その子は名前も捨吉とかお捨とか呼ばれるなどといふ事がある。

最後に不吉な言葉をおめでたい言葉に言換へるのは、婚禮の席に「歸る」と言ふのを嫌つて、「お開きにする」と言ふやうな例で、忌言葉と言つて、今もなかなか廢れずに行はれてゐるものである。

（關根正直の文に據る）

翁格子　大きな格子の中に小さい格子のいくつかある模樣。

四四　死が二つ重なると見て言ふ。

一八　多年一日の修養

村上專精

關根正直　國文學者。文學博士。東京市の人。昭和七年歿、年七十三。

村上專精　佛教學者。文學博士。兵庫縣の人。昭和四年歿、年七十九。

生れながらにして

佛教徒間に「天然の彌勒なく、自然の釋迦なし」といふ諺がある。その意味は、彌勒も釋迦も自然にあれ程の地位になつたのではない。多年一日の如く修行を怠らなかつた結果として、一は菩薩となり、一は佛陀となつたのであるといふのである。また支那の大聖孔子は、生れながらにして道を知つてゐた者のやうに考へられ易いが、論語の中で孔子は自らその經歷を語つて、

大聖人ですらも

心がけないでは

吾十有五にして學に志す。三十にして立つ。四十にして惑はず。五十にして天命を知る。六十にして耳順ふ。七十にして心の欲するところに從つて矩を踰えず。

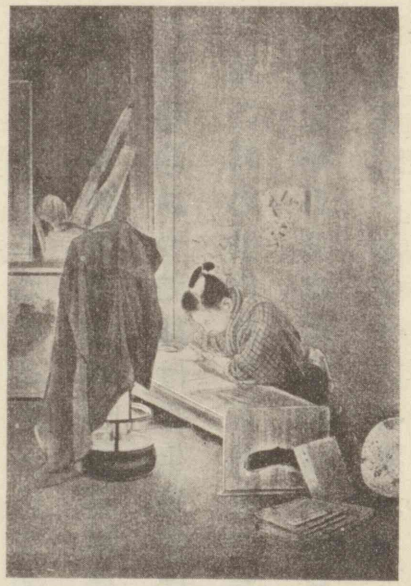
と言つた。卽ち自分は十五歳の時から七十歳の時に至るまで、一日も怠る事なく修養を續けて來たといふのが、孔子の告白である。これによつてみても、釋迦や孔子のやうな大聖人ですらも、多年一日のやうに修養を繼續した結果、始めてあのやうな萬人の光と仰がれる偉い人物となつた事がわかる。まして我々凡人は、一層修養を續けて行く事を心がけないでは、すぐれた人物となる事が出來ない所以を自覺しなければならない。

明らかなのである

賴春水名は惟完、通稱彌太郎。文化十三年（一二四七六年）歿、年七十一。

賴山陽江戸時代末期の學者。名は襄、通稱久太郎。安藝の人。天保三年（一二四九二年）歿、五十三。

しかし、世人一般の通弊として、他人に何かすぐれたところのあるのを見ると、とかく輕卒にこれを評して、彼は才子であるとか、或は彼は幸運兒であるとか言ひたがるのである。例へば賴山陽と言へば、誰もあの人は才子であつたと考へ易く、彼の成功は勤勉によるものであるとの考を抱く者はまことに少い。しかし傳記によつてこれをみると、前者の誤謬である事が明らかなのである。



山陽の幼時（水野年方筆）

賴山陽は江戸時代の儒者賴春水の子である。彼は生れて

わづかに八九歳の頃

日本外史。二十二卷。源平二氏より徳川氏に至る武家の歴史を漢文で書いたもの。

日本政記。十六卷。神武天皇より後陽成天皇に至る百八世、二千年間の編年史。

わづかに八九歳の頃、既に幾多の軍記物を讀んで晝夜怠る事なく、時に寢食を忘れる事もあつた。遇、眼病にかゝつたので、父春水はその讀書を禁じたけれども、なほ隱れてこれを讀む事を止めなかつたといふ。子供の時の山陽は既にこのやうな勤勉家であつた。また傳に「山陽平生讀書に耽り、著述に勤む。」とあつて、彼は終生著述に勤めた人である。卽ち彼の壯年の時の傑作は日本外史であり、また晚年の大作には日本政記がある。日本政記は病中になつた。彼はその病が革るに遇ひ、「我が死まさにせまれり。」と言ひながら、なほ眼鏡をかけ、手に日本政記を取り、刪補して止まなかつた。或日俄に左右を顧み、「我まさに假寢せん。」と言つて筆をおき、眼鏡をかけ

……言つてよい

室内の掃除も……これをなし

たまゝで終に瞑したといふ。彼の少年時代の事を思ひ、また末期の傳を見れば、山陽の生涯は勤勉を以て一貫されてゐたと言つてよいのである。

但し彼は生來酒を嗜んだ。毎日夕刻になれば必ず門下生と共に對飲したさうである。けれどもその分量に制限があつて、制限以上には一杯も過す事はなかつた。そして酒氣のある間は門下生と共に談論し、醒めれば卽ち書を讀み、五更に至らなければ眠らなかつた。朝はまた必ず早起し、しかも自ら衾を收めて人を使はず、室内の掃除もまた自らこれをなし、寒暑一定して變る事はなかつたといふ。これによつて、彼は常に人に語つて、「山陽は才子なりと言ふ者は、未だ我を

……言ふ者こそ我を知る者なれ

……に外ならぬ。

知る者にあらず。山陽はよく勤めたる者なりと言ふ者こそ、眞に我を知る者なれ」と言つたさうである。

彼を思ひ此を考へるに、山陽はたゞ才子であつたと思ふのは誤謬に外ならぬ。彼は多年一日のやうな修養によつて、自己の天才を喚び起した人である。獨り山陽のみならず、何人でも一つの長所を有し、達人であるとか、また上手であるとか評せられる程の人は、必ず多年一日のやうに修養して、自己の天才を喚び起した人に違ない。

しかも修養は、一旦その天才を喚び起す事に努め、後はこれを廢してよいといふわけのものではない。その人の終生を期して廢する事のないのが、眞の修養である。若し中途で

若し……ならば

……なり……なり

老後に至つても

徳川光圀　水戸藩第二代の主。元祿十三年（一三七〇年）歿、年七十三。世に水戸黄門または西山公といふ。

何の苦もなささうに見える

その修養を廢したならば、そのやうな人は、その日から學問なり技能なりの退歩する人であると見てよい。飜つて老後に至つても、なほその道に於て退歩しない人があるならば、その人は常にその道の爲の修養を繼續してゐる人と見てよい。

みればたゞ何の苦もなき水鳥の
足にひまなきわがおもひかな

といふ歌がある。これは水戸黄門德川光圀卿の作と聞いてゐるが、實にその通りである。江河の水面に鴨などの浮んでゐるのを一見すれば、木の葉などの浮いてゐるのと殆ど同樣で、何の苦もなささうに見える。しかし、近寄つてよくこれ

我が足

流れ動いてゐれば腐らぬ

生命のあらん限り

を見れば、少しの暇もなく彼は我が足を使ひ、その足の力によつて浮んでゐるのである。人もまたそのやうに、外見だけでは何の苦もなく出來る事のやうであつても、その人自身にあつては、常に暇なくその道の爲に盡すところがあるに違ない。

人間萬事休息すれば必ず退歩する。水は絶えず流れ動いてゐれば腐らぬが、停滞してゐると腐る。この規則の存する事を忘れぬやうにせねばならぬ。隨つて修養は生命のあらん限り廢すべきものではない。多年一日のやうに繼續すべきものである。そしてさうするのが眞の修養である。

（通俗修養論）

橘南谿　江戸時代中期の醫師、國學者。本名は宮川春暉。伊勢の人。文化二年（二四六五年）歿、年五十三。

中江藤樹　江戸時代初期の儒者。名は原。世に近江聖人といはれる。慶安元年（二三〇八年）歿、年四十一。

大溝　今、滋賀縣高島郡大溝町。

小川村　今、滋賀縣高島郡青柳村の字。

王陽明　明の大儒。

熊澤蕃山　江戸時代初期の儒者。京都の人。元祿四年（一六九一年）歿、年七十三。

一九　教化の力

橘　南谿

中江藤樹先生は俗稱を與右衛門といひ、江州大溝在なる小川村の百姓の家に生れにき。學、王陽明の流を汲みて、その德行一世に秀で、遠近皆その風を望まざるはなかりきといふ。

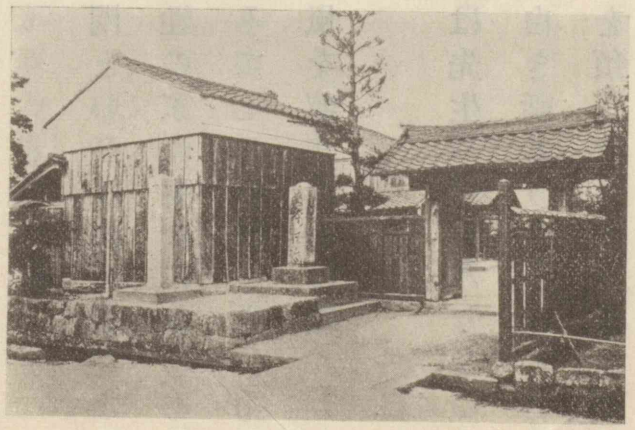
中江藤樹

熊澤蕃山は先生の門人なり。この人の先生に從ひし始を尋ぬるに、面白き話あり。

その頃、加賀の飛脚、金子二百兩を預り持ちて京へ上るに、江州河原市より馬を雇ひて、榎木の宿に到りて泊りぬ。馬方

二百兩　なくば

河原市へ歸りて、馬を洗はんと鞍を解きつれば、財布一つ出でたり。取上げて見れば、金二百兩あり。大きに驚き、急ぎ榎木に行きて、かの飛脚の泊れる宿に到り、對面して委しく尋ね問ふに、その人の忘れしものに相違なければ、これを返しけり。飛脚は死したる者の蘇りたる心地して、悅の餘り、行李より別の金子十五兩を取出して馬方に與へ、「若しこの二百兩なくば、我が一命を失ふのみならず、親兄弟までも重き罪に行はれんさればこの高恩なか〳〵言葉の言盡すべきにあらざれども、まづ當座の御禮までにこれを贈り奉る。」と、涙を流して喜ぶ。馬方大きに驚ける面持にて、「そなたの金をそなたに取納め給ふに、何の禮といふ事あるべき。」とて、手にだに取らず。



藤樹書院

手にだに取らず

いろ〳〵にこしらへ言へども、更に受けずして歸らんとする故、止むを得ず十兩となし、五兩となし、三兩となし、次第に減じて、終には金二分となし、「せめてこればかりは。」と理を盡し詞を盡して言ふに、「この金を受くる程ならば、二百兩をも留め置くべし。かく返し申すからには、いさゝかにても謝禮を受くるは我が心にあらず。されど餘りに餘儀なく宣へ

いさゝか（些、聊）

堪へかねて

講釋といふ事をせらる

ことわりなし

ば、さらば鳥目二百文を賜へ。これは今夜休むべきところを、これまで追掛け來れる賃錢なり。これは我が取るべき錢なれば申し請くべし」と言ひて、二百文を懷にし、歸らんとす。

飛脚は感に堪へかねて、その氏素姓を尋ね問ふに、「名ある者にあらず。また何一つ知れる者にもあらず。たゞ我が里の近くに、小川村といふ所あり。其所に與右衞門といふ人おはして、夜毎に講釋といふ事をせらる。それがしもをりふし行きて聽き申したるに、親には孝を盡すべし、主人は大切にすべきものなり、人の物は取らぬものなり、無理非道は行ふべからずなどいふこと、常に語り給ふにより、今日の金子も我が物にあらざれば、取るべきことわりなしと心得しまでの事なり」と言捨てて歸りぬ。

飛脚はそれより京に上りて、いつもの宿に到り、「さても此度はからき命生き延びて、各方にも對面する事を得たり」とて、ありし次第を委しく語りけり。

その人こそものなれ

蕃山をりふし田舍より上りゐて、學問修業の最中なりしが、この物語を聞きて、「その人こそまことの儒といふものなれ」とて、翌日すぐに江州に到り、小川村に藤樹先生を尋ねて隨從を願ひたるに、「人に教へ申す程の學德なし」とて、更に許し給はず。蕃山ひたすらに願ひて、二日が間先生の門に佇みて歸らず。先生の老母これを氣の毒がり、「ともかくも內に入れ申せよ」とあるに、いなみがたくて內に入れ、遂に師弟の契

約をせられけりとぞ。

その後、先生を備前侯の招き給へる時、その身は病身なりとて固く辭し、「門人に熊澤といふ者あり、御役にも立つべき者なり」とて、蕃山を出されけり。

いづれも格別の事どもなり。（東遊記の文に據る）

備前侯　岡山の城主。池田光政。

村井弦齋　小説家、本草家。名は寛。愛知縣の人。昭和二年歿、年六十五。

滋賀のやま　滋賀縣滋賀郡滋賀村の山。

二〇　近江聖人の母

村井弦齋

雪ならば幾たび袖をはらはまし
はなの吹雪の滋賀のやまごえ

それは彌生の春の頃、櫻狩して行く道の、眺もあかぬ旅なれども、これは習はぬ冬の旅、花の吹雪のそれならで、霏々たる雪は路を沒し、凜冽たる風は膚を裂く。

辛苦の中に滋賀の山をうち越ゆれば、滿目蕭條たる湖上の風景。辛崎の松は暮靄朦朧の間に隱れて、堅田に落つる雁の聲のみ寒く鳴き渡る。見渡せば白雪皚々たる比良の山、今よりこの山路にかゝらば、山中にて日は暮れん。疲れし足の進みがたきに坂本の邊にて宿を求めんかと、獨旅の少年は前路を睨んで、暫く湖畔に立ちたりしが、稍ありて思ひ返し、「かの山を越ゆれば我が故郷、今一息にて母君の許に著くなるに、何とて空しく此所に留らん。夜にてもあれ、朝にてもあれ、家に歸らば疲も厭はじ。いで〳〵心を取直し、今宵の中にこの山を越えんものを」と、再び足を踏みしめて、薄暗き山路

坂本　同縣同郡坂本村。

我が故郷　同縣高島郡小川村。

夜にても疲れ……厭はじ

へこそはかゝりけれ。

痛はしや藤太郎、母に逢ひたき一心より、踏みも習はぬ山路を、杖にすがりてたゞ一人、たどり〳〵て行く道の、岩につまづき木の根に倒れ、血さへ足より流れ出で、道の邊の雪を紅に染めながら、なほも心を勵まして、風雪の中を登り行く。やがて日は暮れたり。闇の夜ながら雪明りに路は見ゆれど、いや増す寒さは骨にとほりて、手も足も凍るばかり。一山寂寞として耳に答ふるものとては、閉ぢし氷の下くゞる細谷川の水の音、杉の枯葉を鳴らす風、或は積雪梢を壓して、枝折れ雪の落つる響なんど、幽かにもの凄く聞えて、怖しとも悲しとも譬へんやうなし。かゝる難所と知りもせば、麓にて一

譬へんやうなし

起きもえ上らず

夜を明かしし、ものを、旅慣れぬ身の悲しさ、足に任せてこの深山路へかゝりしが、今は足疲れ身體凍りて、先へも出でられず、後へも戻られず。少年は進退谷りて、半ば死せるもの如く、松の根方にうち倒れたり。起きもえ上らず、しばし降る雪を恨めしげに眺めてありけるが、腹は次第に餓を感じて、寒さは一入身にしみわたり、眠るともなく死ぬともなく、前後も知らずなりにけり。

懐かしの故郷や、藤太郎は昔覺えし山川草木を眼の前に見て、忽ち足の疲もうち忘れ、路を急ぎて我が家の方へ向かひけり。夜は漸く明けたれども、雪天の寒さに閉ぢられてや、道々の家は未だ多く起出でず。かの家は我が友の家なりけ

我に優しき老人ありき

何人か水を汲めり

り。この家には我に優しき老人ありきなどと、昔の事を想ひ出でて、すゞろにあはれを催しつゝ、須臾にして我が家の前に來れり。

見れば、衡門舊に依つて立ちたれども、半ば雨に朽ちて、また昔日の觀にあらず。柱も傾ける所あり。築地も崩れたる所あり。前庭の古松、刈る人なければ枝繁れり。修竹一叢思ふまに根を延して、彼方此方に生出でたる若竹は、雪に堪へざる風情あり。玄關の戸は未だ開かず。母人は未だ起出で給はぬにやあらんと、築地の蔭より内に入りて、勝手の方を見れば、車井のきしる音さも寒げに聞えて、何人か水を汲めり。姿は確かに母人なり。少年は忽ち胸塞がりぬ。昔は數多の男女を召使ひて、勝手などに出でられし事なき母様が、この雪の朝の寒天に、自ら車井の水を汲み給ふか、情なしと、湧出づる涙とゞめ敢へず。急ぎ車井の側に駈行きて、後よりその袂を引き、「母様、私が汲みませう」と、涙ながらに取りすがる。

叔父様と御一緒でも

事の不意なるに母は驚きて振返り、「誰か。藤太郎。どうして此所へ」。藤太郎は細き聲、「はい、母様の御手助をいたしに參りました。まづ内へお入りあそばせ。おつむりに雪がかゝります」と孝子の眞情、片時も母をこの雪中に立たしめざらんとす。母は車井の綱をしつかと握りしまゝ、石の如く立てり。「叔父様とでも御一緒か」。「いえ、たゞ一人で」。母は聲を勵まし、「叔父様が一人和郎をお出しなされたか」。「いえ、叔父様には知らせ

ずに參りました。母は眉を揚げ、「怪しからぬ。何故そんな事を。さあお話しなさい、和郎が歸つたわけを。いえ、此所で聞きませう。聞かないうちは、めつたに家へは入れません。」さつと吹來る朝風に、地上の雪はくる〳〵と捲揚げられて、横に二人の顔を打つ。

藤太郎は歸りし次第を物語りぬ。母は我が子の優しき心根に、すゞろ涙に咽びしが、忽ち思ひ返しけん、わざと言葉を勵まして、「和郎はこの母の言葉を忘れましたか。和郎を叔父様に賴む時、一旦國を出たからは、あつぱれりつぱな人にならないうちは、決して中途で歸るなと、あれ程堅く言聞かせた事を忘れましたか。この母が難儀を忍ぶのも、たゞ和郎を

いえ　此所で聞きませう

あつぱれ（天晴、適）

りつぱな者にしたいばかり。りつぱな者にならないで、家にゐて手助をしてくれたとて、なんのそれが嬉しからう。一人で來たものなら、一人で歸れぬ事はあるまい。母は再び逢ひませんぞ。その足ですぐ大洲へお歸りなさい。」

餘りの事に藤太郎は默然として言葉も出でず、力拔けて、雪の上に跪きぬ。母はその失望せる樣子を見て、痛はしさ胸に滿ち、かくまで我が身を思うて來りしものを、百里の道の一人旅、定めて憂き事もつらき事も多かりしならん。せめて一日なりとも家に入れて、旅の疲を休めさせんかと、恩愛の情に心も亂れんとするを、忽ちにしてまた思ひ直し、なまなかに弱き心を見せなば修業の邪魔。獅子は子を千仞の谷に

大洲　愛媛縣喜多郡大洲町。

失望せる樣子を見て

それなら今から歸りますか

これだけはお取りなされて下されて

落すと聞くものを。「和郎は母のいふ事がわかりませんか」と強くは叱れど、聲はうるみぬ。

藤太郎は落つる涙を拭ひつゝ、頭を垂れしまゝ、微かなる聲にて「はい、わかりました。」「それなら今から歸りますか」藤太郎は悲しき聲「はい、歸ります」と素直に言ふ。母は素直に答へられては、なほさら腸の絞らるゝ思ひ。遂に堪へかねて忍泣き、袖咬みしめて聲を呑む。藤太郎はきつとして立上れり。「母様、この藥はあかぎれの妙藥で、世にも得がたき品。これ差上げたいとわざ〳〵持つて參りましたもの。これだけはお取りなされて下され」と、途中にて得し藥を差出す。母は快く「お和郎の志、これだけは受けませう」と手に取らんとて下を

向く。藤太郎は渡さんとて上を向く。見合す顏、互の眼には涙一杯。

母は耻づかしと、じつと耐ふる心の苦しさ。子は堪へざりけん、藥を手より取落してうつ向けば、雪の上にほろ〳〵と落つる涙。

雪はなほ霏々たり。母が汲置きし水を見れば、何時の間に張りけん、上は一面の薄氷となれり。藤太郎は遂に心を勵まして、泣く〳〵我が家を立出でたり。見送る母、見返る子。滿天の風雪路悠々。

（近江聖人）

加藤武雄　小説家。明治二十一年神奈川縣に生れた。

今朝は山に雪が來たぞ

二　麥笛

加藤武雄

神嘗祭の頃になると、山茶花の花が咲く。山茶花の花が咲く頃になると、家の庭から眺めやられる國境の連山の頂が、まだらに雪を置き始める。

「おゝ、寒い。寒いはずだ。今朝は山に雪が來たぞ。」

さう言つて、遠山の雪に瞳をあげる心持、あのきいと心が引きしまるやうな新鮮な心持は、山國に育つた人ならば、誰でも經驗するところであらう。

その山の雪が朝毎に白い部分を增して行つて、やがて眞白になる頃には、「富士隱し」と私たちが呼びならはしてゐた一際高い峯の肩の所にある富士山が、ひよつこりと額をのぞかせる。多分光線の工合なのだらうと思ふが、その頃の私たちは、富士山に雪が積つて、それだけ富士山の背丈が高くなつたのだとばかり思つてゐた。梯形になつてゐた頂部の一角だけが、ほんのちらりと見えるだけなので、勿論八朶の花に喩へられるあの全容をはうふつすべくはなかつたが、それでも、「おらの村からは富士山が見えるぞ。」と、隣村から來る學校友だちには、それを自分のもののやうに自慢したものだつた。

が、その富士山も、寒い盛りの三十日か四十日の間、ちらりと額を見せただけで引つこんでしまふ。背伸びして、ちらと

そのかの富士山も寒い盛りの三十日か四十日の間……

もうだ　春なの

のぞいて見た――まあ、さういつた感じなのだ。富士山が見えなくなる頃には、山々の雪も消えそめて、匂やかな紫紺の山肌が、光を含んだ藍色の空にほのめく。どうかすると、その山々の輪郭が、一抹の夕雲に溶けこんでしまふ。すると、その夜から降出した柔かな雨が、二日も三日も降續く。それがあがると、もう春なのだ。北相模の高原の山裾の村には、かうして春が訪れるのだ。

春が深くなると共に麥が伸びる。桑が芽を吹く。麥畑、桑畑の間を帶のやうに伸びた野路を一、二キロメートル、二つ三つの部落と一つの驛とを通り抜けて、その驛のはづれの高

偏窟な子供だつたので……

私は好んでそれを吹いた

臺にある小學校へ、私は尋常を四年、高等を四年、前後八年通つたのである。

麥笛（田中針水筆）

私は偏窟な子供だつたので、往きにも復りにも、友だちの群を離れて、一人の時が多かつた。私は一人で淋しくその野路を歩きながら、麥笛をこしらへては吹鳴らした。麥笛、――田舍育ちの人たちは皆知つてゐよう。あの柔かな麥の莖を八、九センチメートルの長さに切つてこしらへた小さな笛、唾をつけて吹くと、單調な音を出す小さな笛。私は好ん

でそれを吹いた。それを吹き〳〵、長い野路の盡きるのを忘れて歩いた。

私は今でもあの麥の莖の甘酸つぱい舌ざはりをありありと喚び起す事が出來る。

その頃の私は、悲しみをも、喜をも淋しさをも、あこがれをも、あの單調な麥笛の調べのうちに、自由に歌ひ出す事が出來たのだつた。

麥笛で思ひ出したが、まだ笛にする事が出來るまでに麥が大きくならないで、黑い土に飛白の模樣を置いてゐる頃だから、勿論冬のうちの事だが、私たちはよく麥踏みといふ事をさせられたものだ。

霜柱で根が拔けあがるのを防ぐ爲、またより強く伸びる力を刺戟する爲に、七、八センチメートルくらゐに生えあがつた麥の芽をわざと踏附けてやるのだが、その麥踏みの時、土の中から栗の實だの、かしの實だのがころ〳〵と足許に轉び出る事があつた。

こんな所にどうしてと、不思議に思つてきいて見ると、祖父は次のやうな事を話してくれた。

それはかけすが山からくはへて來て、其所に埋めて置いたのだ。かけすはそれを埋める時、空にある雲を心覺えにして、その雲の下に埋めるのだが、その心覺えの雲はすぐ動き去つたり、消え失せたりするものだから、かはいさうにかけ

すの奴、せつかく埋めて置きながら、見附ける事が出來ないのだ――。

私は子供心に、心からかけすを憐んだ事があつた。

それはたゞかけすばかりの悲しみではないといふ事を、二十年後の今の私はよく知つてゐる。

（わが小畫板）

二二　新柳

與謝野晶子

與謝野晶子詩人、歌人。明治十一年堺市に生れた。

空はるり色、雨のあと、
並木の柳まんまろく、
なびく新芽の淺みどり。

すこし離れて見るときは、
散歩の路の少女らが
深々とさす日傘（パラソル）か。

蔭に立寄り見るときは、
繪の中に舞ふ鳳凰の、
雲より垂れた錦尾か。

空はるり色、雨のあと、
並木の柳その枝を、
引けば翡翠の露が散る。

鶴見祐輔
政治家、評論家、小説家。明治十八年群馬縣に生れた。
フランス（佛蘭西）
イギリス（英吉利）

……やうである

アメリカ（亞米利加）

二三　三都氣質

鶴見祐輔

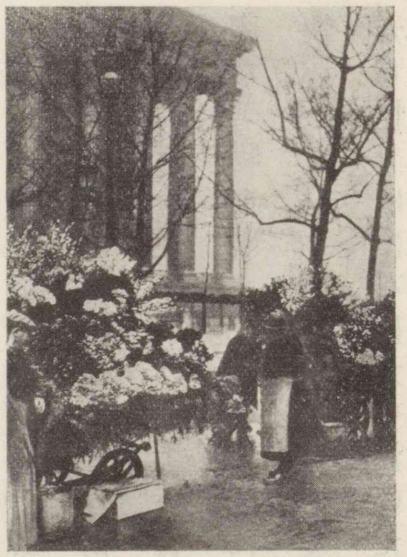
フランス人は勤勉な國民である。イギリス人も勤勉な國民である。しかし、その勤勉さには相違があるやうに思はれる。勤勉それ自身に本來の差があるわけはないけれども、英佛人の勤勉性の差は、單に外形上、形式上の相違だけにはとどまらぬやうである。それは兩國民の國民性の相違から生ずるのではあるまいか。然らばその國民性はいかに相違してゐるだらうか。こんな事を考へながら、私は一人でよくパリの公園を歩いてゐた。そしてこれにアメリカを今一つ加へて、よく三國の國民性を比較してみた。

ニューヨーク（紐育）

我々は……意識せずにはゐられない

ロンドン（倫敦）

三國の特色は、その國の大都會に於て著しく眼に著く。都會はその國の國民性を最も鮮かに映し出してゐるからである。多くの人は、ニューヨークは餘りに歐洲化してゐると言ふ。しかし、ニューヨークに一日ゐると、我々はアメリカの大空氣が全身に躍動するのを意識せずにはゐられない。ニューヨークはやはり米國である。そしてロンドンは英國であり、パリは佛國である。恰も東京が日本であるやうに。



パリの花賣

打水がしてある

注いだりなどしてゐる

話はまた英佛人の勤勉性にかへる。朝早くパリの街を歩くと、石の鋪道の上には、もう綺麗に打水がしてある。凱旋門のあたりの廣場には、花賣の露臺が幾つともなく立並んで、新聞賣の小舍と共に、心地よい朝の活動を象徴してゐる。黑い質素な著物を著た女たちが、耳に快いフランス語で笑ひ興じながら、忙しげに花に水を注いだりなどしてゐる。

ロンドンの商業中心街

ロンドンの下町に晝頃行くと、狹い側道の上に商館や銀

アフリカ（亞弗利加）

…意味が……しみて行つた

行などの書記かと見える若者が、帽子も冠らずに何百人となく忙しげに往來してゐる。私はこの群の中を縫ふやうにして歩きながら、遠いアフリカや印度の貿易を机の上でやつてゐるこの人々の日常生活を考へた。そしてフランス人とは種類の違ふこの人々の勤勉さをも考へた。こんな時には、何時もフランスの或小説家の言葉が腦裡に閃いた「佛國人は蜜蜂のやうに勤勉に英國人は蟻のやうに精勵である」。と。パリとロンドンとの生活を見てゐるうちに、この言葉の深い意味が日一日と自分の頭腦に深くしみて行つた。晴渡つた初夏の日盛に、寸刻の休もなく、花から花へ蜜を求めて翔つて行く可憐な蜜蜂の勤勉が、いかにもよく佛國人の心

何に喩へられようか。

淺草の觀音堂　東京市淺草區淺草公園にある天台宗金龍山淺草寺の本堂。

持を表してをり、來るべき冬の準備の爲、營々として重い餌を引きずつて行くけなげな蟻の精根が、いかにもよく英國人の勤勉を表してゐるやうに思はれた。

それならば、米國人のあのいら〳〵した忙しさは、何に喩へられようかと考へて見た。私の頭の中に、ふと淺草の觀音堂の鳩が浮んで來た。何時行つて見ても、大勢の人込の中で、幾十百羽の鳩が我劣らじと押合ひ壓合ひ、地上の豆を拾つてゐる。物音に脅されて飛立たうと、半分氣を外に配りながら、それでも眼前の豆粒は一つでも餘計に食べようと、眼の色を變へて何時までも餌を拾つてゐる。米國人の勤勉はまさにこの鳩のやうに餘裕がないと、私には考へられた。

……人々は……目撃する

あつけ（呆氣）

朝の出勤時間頃にニューヨークの地下鐵道に乗る人々は、これがこの世ながらの阿鼻叫喚ではないかと思はれるやうな雜沓を目撃する。或日私は汽車の切符を買ひに市内營業所へ行つた。大勢の客が群集してゐた。係の若い米國人が、私の行先と乘るべき列車とを聽取り、やがて右手の袖をちよつと捲り上げて、鉛筆持つその手を、切符の紙の上で左右に五六回激しく振つた。何をするのかとあつけにとられて見てゐると、忽ちくわつと手を紙の上

出勤時のニューヨーク街頭

字が書けようし

もらふ（貰）

件の

に落して、する〳〵と切符の文字を眼の廻るやうな早さで書終へた。今手を振つたのは、結局手に運轉をつける爲だつた。私は噴出すやうなをかしさを感じた。何もさう手に運轉をつけないでも、大して時間に相違もなく字が書けようし、また運轉をつける時間だけ無益のやうな氣もした。

その翌年、私は英國の商務院の鐵道局に、賃金の一覽表をもらひに行つた。すると係の若い英國紳士が「確かこの机の中に一枚だけ一覽表を入れて置いたはずだ」と言つて、自分の机の抽斗をあけた。私は見るともなくその中をのぞきこんで見て、驚いた。まあ、何といふ多數の書類だらう。累々と種種な紙片が堆積されてある。それを件の若い紳士は、手を突

とても覺えられませんね

つこんで、がさ〳〵と搔廻して「此所にはない。」と言つて、次の抽斗、またその次の抽斗をあけ、そして最後の抽斗の底から、やつと見附け出した。

「これは差上げるわけにいかないから、其所で見て下さい。」と言ふから「一度見ただけでは、とても覺えられませんね。」と答へると、ちよつと當惑して、「それでは私が寫して上げませう。」と言つて、それを別な白紙に筆寫し始めた。

ニューヨークならば、傍にゐる若い女のタイピストに命じて、一分間に寫させるところだが、件の若い紳士は、まづ自分の机の上の大きな吸取紙の上に原本の一覽表を置いて、その上に白紙をあてて書出した。私はちよつと面喰つた形で、

下敷になつてゐる吸取紙

この異様な淨書法を見てゐた。すると、彼は白紙の上に數字を一行書いた。そして今度はその白紙を左手で持上げて、下の原本をのぞいて、次の行の數字を暗記して、また白紙をその上にべたりと置いて、暗記しただけ書いて、また前のやうに紙を持上げて原本をのぞいて、またその上に重ねて書いた。不思議な遣方だと見てゐると、やがて書終へた。インキが乾いてゐない。そこで、今度はその紙と原本と二枚持上げて、下敷になつてゐる吸取紙の上に裏向に置いて、ていねいにインキを拭取つて、さて私にその淨書したのをくれた。

ニューヨークから著いたばかりの私は、全くあつけにとられて、此所を出て行つた。そして幾回となく鉛筆持つ手を振

私は……書いた

私は……言ふと

つて運轉をつけて、猛烈な勢で切符の文字を書いた米國人と較べて考へて見た。

その春、パリの郵便局に書留小包を出しに行つた。馴れない私は、誤つて受取人欄へ自分の住所姓名、差出人の欄へ先方の住所姓名を書いた。これを局の小窓から差出す時、私はふと氣附いて、思はず「おや」と言ふと、局員の佛國人がつとペンを取上げて、受取人といふ字を抹消して差出人と書き、差出人といふ字を抹消して受取人と書いた。成程これで送票は完成したわけである。しかもそれがほんの一瞬間の事だつた。

私は全く感服してしまつた。そして、ニューヨークの切符賣

と、ロンドンの役人と、パリの郵便局員とを頭の中で列べてみた。鳩と、蟻と蜜蜂と。

（三都物語）

穂積重遠

自修文

英國の強み

穂積重遠　法學博士。法學者。東京帝國大學教授。男爵。明治十六年東京市に生れた。

私が英國にをりました時、頗る感心した事があります。當時私は留學生の事ですから、大したりつぱな宿を取るわけには行かず、まづ素人下宿といつたやうな、場所も東京で言ふともとの早稲田とでも言ふべき、郊外に近い所に下宿してをりました。その家の主人はオールドミスで、ごく無學な、一向大した人間ではありませんでした。

留學生　外國に行つて學問を勉強する學生。

早稲田　牛込區。もとは西北郊に接してゐたが、大東京となつて郊外からは遠くなつた。

オールドミス（老嬢）

ちやうど世界大戰の始め頃でしたが、その婆さんが私の部屋にやつて來て、陸軍大臣に――當時はキッチナー將軍でありました――手紙を出したいが、宛名をどう書いたらよからうかと尋ねるのでした。そんな事を外國人に尋ねるくらゐだから、その無學の程度もわかりますが、とにかく、だしぬけにそんな事を問はれましたので、私も面食ひましたが、幸にレターライターといふやうな、書翰の書き方の手引の本がありましたから、それを引つぱり出して、陸軍大臣キッチナー將軍閣下といふやうな書き方を教へてやりました。

キッチナー　イギリスの元帥。歐洲大戰當時、陸軍大臣として非凡の手腕を發揮した。（西紀一八五〇―一九一六年）

それで、何だつてキッチナー將軍なんかに手紙を書くのか。と聞きますと、「いや、私は大いに考へてゐる事がある。それは、近頃ドイツ軍の勢が非常に盛んで、我が軍の兵力が足りない爲、キッチナー將軍が非常に困つてをられる。ところで、昨今ベルギー人が澤山英國に遁れて來てゐる。亡國の民となつて遁げて來てゐるのだから、勿論氣の毒である。殊に女や老人子供たちはかはいさうだ。

亡國の民　此所ではほろびかかつた國の民。

のめ〳〵と恥を恥としないで、あつかましく。
敵愾心　敵と爭はうとする意氣。
軍國多事　戰爭のある爲國事の忙しいこと。
金釘流　金釘のやうな字體の流派と言ふので、惡筆を嘲つて言ふ稱。

しかし、りつぱな體格を持つた若者までが、のめ〳〵と自分の國を追はれて來て、このロンドンで活動寫眞などを見て、毎日ぶらぶらしてゐるのは怪しからん。だから、あゝいふ連中を驅集め、ベルギー聯隊を組織して戰場に送るがよい。さうすれば、兵隊の足りない補ひにもなるし、ベルギー人にしても、十分敵愾心を持つてゐるはずだから、眞劍に働くだらう。さういふ事をキッチナー將軍へ書いて送るのだ。」と答へました。「成程、それは妙案だらうが、それくらゐの事はキッチナー將軍も考へてをられるであらうし、またそんな連中を驅出しても、役に立たないと思つてをられるかも知れん。とにかくこの軍國多事の場合に、キッチナー將軍があなたの手紙などを讀むものか。」と言ひますと、婆さんは大いに憤慨して、「いや、どうあつても手紙を出す。」と言つて、金釘流で大骨折をして、書いて出しました。私の外にも日本人が一緒にをりました

署名　姓名をしるすこと。
詮議する　人々が集つて、物事をしらべさだめること。
篤と　念を入れて。

ので、「隨分物好な婆さんもあるものだ。」と、話し合つて笑つてをりました。さうすると、三日と經たないうちでした。朝早くまだ顏も洗はないところへ、婆さんが息をはずませながらやつて來て、「そら、この通りキッチナー將軍から返事が來た。」と言ひました。見ると、大きなりつぱな封筒に、「陸軍省」といふ字が入つてをります。開くと、タイプライターで綺麗に打つた手紙で、終にキッチナーといふ署名がしてあります。肉筆ではなく、筆蹟をゴム印にしたものと思はれましたが、とにかく將軍の署名のある返事が、三日と經たないうちに來たのです。中を讀んでみると、「お手紙頂戴しました。御申越の御注意はまことに忝い。御忠告の點は篤と詮議して、御趣意に副ふやうにいたします。」と、かういふ文意でありました。それで婆さんは非常に喜んで、大自慢で、私に見せに來たのです。

その時に私は、成程英國の強みはこゝにあると思ひました。即

國家の重きに任ずる　重大な國家の仕事を身に負ふ。

國家の要路に立つ　國家の重要な政務にたづさはる。

ち無學な下宿の婆さんでも、ほんたうに眞面目に自分が國家の一員であつて、國家の重きに任じ、國事に就いてはどこまでも心配しなければならないと考へ、その考へた事をこそ〳〵と蔭で言ふのではなく、すぐ陸軍大臣へでも誰へでも書いてやる。それをまた大臣が受取つて、そのまゝ反古籠に投込むといふやうな事をせず、忙しい中で折返し返事を出して、「御注意まことにありがたい。よく考へませう。」と、鄭重に答へます、これが英國の立憲政治の美しい所以だと、深く感じたのです。

私は我が國も實際かういふ風でなくてはならないと思ひます。我々は天皇陛下を戴いてこの日本の國を作つてをります。我我一人々々が日本國民として國家の重きに任じてゐるといふ事を、皆がほんたうに考へなければなりません。また國家の要路に立つ人々にも、さう思つて戴かなければなりません。無論考へてはをられませうが、しかし、下宿の婆さんへでもすぐに返事を出すといふ心持があつてほしいと思ひます。かういふ考の人が寄合つてこそ、始めて「我が國」と言ひ得るのです。英國人はよく「アワ・カントリー」とか、「アワ・キング」とか言ひますが、この「アワ」が非常に強く響きます。我々の國であり、我々の王樣であるといふ感じが非常に強く現れます。この「アワ」卽ち「我々の」といふ感じを日本國民全體が起す事が、日本國を一層強く且美しくする所以であると私は思ふのであります。

（共同生活觀念の確立）

往來で遇つても

二四　禮儀作法

日本人は禮儀正しい國民である。知人は往來で遇つてもていねいに頭を下げ、腰を曲げて、二度も三度もお辭儀をす

かやう（斯樣）

あいさつ（挨拶）

家來が……並びもせぬ

る。かやうな事は外國では見られぬ事であるから、自國の風俗に較べて西洋人は珍しく思ひ、我が國民の禮儀作法に厚いのに感心するのである。また日本人が始めて西洋の社會にはいれば、その應對やあいさつの甚だ簡易なのに驚くのである。余は始めて外國の芝居を見た時、王樣の前に出た大勢の家來がお辭儀もせず、行儀よく並びもせぬのを異樣に感じた。日本の芝居を見馴れた目には、餘程奇怪に感じたのである。

日本人の現今の禮節は、久しい間の封建時代を經て、甚だしく煩はしくなつたものに相違ない。當時社會が上下種々な階級に分れて、自分の仕へる主君の上に主君があり、その

さかのぼる（遡）

上にもまた主君があるといふ有樣であつたから、主君に頭を下げる度よりは、今一層低く主君の主君に向つては下げねばならず、主君の主君が頭を下げる主君の主君の主君には、土下坐もしなければならぬといふ風に、多くのむづかしい禮儀の階級や、尊卑の階級が生じた。また上からは自分の尊嚴を保つ爲に、だん〳〵と下の方へ向つて禮節を嚴重に守らせたのである。かやうに封建時代階級の制度が、七重の膝を八重にも折るといふ禮節を作つてゐるには相違ないが、しかし、その本源にさかのぼれば、遠い昔の神を貴ぶ民族の風から出たのである。古代の國語を見るのに、既に多くの敬語をもつてゐる。古事記の神々の名には、數多の敬語や尊

稱が含まれてゐる。神名の上に天、神、稜威(いつ)嚴、齋(いみ)(忌)御(み)、廣(ひろ)、大(おほ)などの語のあるのは、皆その事業や性行などに就いて讃美の意を表したのである。「ひこ」「ひめ」は「日子」「日女」である。「みこと」は「御事」である。また「御子(皇子)」、「御家(宮)」などは、すべて「御」といふ敬稱辭を附加したものである。「お(御)」は「おほ」の略「おほ」は「大」「多」などの語基で、これも敬稱辭である。かやうな敬語が、後世になるに隨つて神、皇室、皇族から大臣、公卿にも用ひられ、次第に廣がつて一般人の間にも用ひられるやうになつて、今日のやうに敬語の多い日本語となつたのである。

かやうな敬語が……用ひられるやうになつて

支那民族も我が民族と同じく祖先崇拜の民族である。祖先の祭祀を大切にする民族である。社稷といふ語が國家の意味になつたのは、この爲である。孔子の教には禮を第一に數へてある。この教が我が國に入つた事も、確かに我が國民の禮節を重んずるやうになつた一原因には相違ないが、これを待つて始めて我が國民が禮を知つたと思ふのは、大きな誤である。我が國民は上代からまつりごとを以て國を建てた國民であるから、上代から禮儀作法に於て愼んだ事は言ふまでもない。

我が國民の……なつた

「をがむ」といふ語は「をろがむ」の略で、「をれかゞむ」から出た語である。我が國民が神を祭る時には、坐つて禮拜するので、それから出來た語である。祭祀に用ひた祝詞(のりと)の文の結構は、恰もその儀容を見るやうに、語を重複し對句を重複し、文段

祝詞の文の結構は……莊重森嚴に出來てゐる

を重複して、莊重森嚴に出來てゐる。かやうに神を祭る儀式祖先を祭る儀禮を貴んだから、これが平常の坐作進退にまで及び、神に對する心得が日常の生活にまで及んで、後世の禮儀作法が出來たのである。

かみを祭り、かみに對する時程、心の正しい時はない。「禮」の古語は「ゐや」である。ゐや〳〵しく（恭しく）神を祭る時の態度がゐやである。卽ちこのゐやを以て身を修め、それに則とつて平生の坐作進退をなす事は、人の最もりつぱな行跡で、一室に獨坐する時でも、その心がけ、その態度でをらねばならぬといふ考が、國民の禮儀を發達させた重大な原因である。儒教はこの點に於ても、よく我が國民性に合したものであ

……といふ考が……原因である

西洋に於ても……ある

これは……主になつてゐる

歐米諸國と……我が國との間

學生社會に於ては……薄い

るから、一層この風を盛んならしめた。かの勢望ある人の權威命令は、たゞこの風習を利用して、一層その段階を作つたに過ぎぬものである。

西洋に於ても、また種々な禮儀作法がある。交際上の習慣はなか〳〵むづかしいものである。これは昔の騎士道から發達して、婦人を重んずる事が主になつてゐる。文明國である以上、日常の交際に禮節を重んずるのは當然であるが、元來が平等主義の歐米諸國と、元來が「かみ」崇拜の我が國との間には、自然に差別があるのである。階級制度の廢棄と、西洋文物の輸入とで、今日の我が國の禮儀作法は大いに亂れてゐる。學生社會に於ては殊に禮節の觀念が薄い。古來「かみ」を

やつたればこそ

鳩山春子　教育家。共立女子專門學校長。文久元年（一八六一年）江戸（東京市）に生れた。

かやうに　自稱する

貴ぶ禮節の國民が、このやうに一切の舊禮を忘れる程の大變革をやつたればこそ、明治の維新も出來たのではあるが、せめては一切の禮式に於て、もう少し秩序が立ち、統一がなければなるまいと思ふ。國民は決して我が國體と大關係ある禮節を忘れてはならぬのである。

二五　家庭に於ける禮讓

鳩山春子

私どもは自分自ら萬物の靈長と稱して誇つてゐるのでありますが、かやうに自稱する人類の中にも非常に高尚な、上品な人もあれば、また動物にも劣るやうな野卑な、下品な人もあります。同じやうに文明の恩澤を受けながら、軒を並

生じさせるもの

何でありませうか

べて住まつてゐる者の中にも、品性の高い卑いいろ〳〵の相違があります。この相違を生じさせるものは一體何でありませうか。言換へると、廣い意味にいふ人品の高下を定めるもの、どんな場合にも自分の品位を保つと共に、他人に對する尊敬をも失はないやうな、眞の意味に於ける紳士、淑女の資格を作り上げる上に最も大きな働をするものは何でありませうか。それは實に家庭に於ける禮讓であります。

法律は私どもに對して、かういふ事をしては他人を侮辱するとか、または自分の義務を怠るとかいつて、そのやうな行爲に對して制裁を加へるものでありますが、しかし、日常の行爲に就いて一々具體的に善處の方法を教へるもので

はありません。それに反して禮讓は、朝起きるから夜眠るまで、私どもの經驗するすべての事に就いて、自分の人品を高め、他人の感情を和らげる道を教へてくれるものであります。英國の名高い政治家で且歴史家であつたエドモンド・バークといふ人は、「禮讓は法律よりも肝要だ」と言つてをりますが、それはこの意味を申したのであります。

禮儀のない家庭に育つた子供は、必ず不作法なものであります。諺にも「氏より育ち」と申しまして、世間には、氏は良くても家庭が良くない爲に、習性となつて、禮讓の何たるかを理解しない下卑た人間となる者が澤山あります。私はこの點に於て、禮讓は空氣と比較する事が出來ると思ひます。

エドモンド・バーク（西紀一七二九―一七九七年）

若し多人數集つた部屋の中に、窓を締切つて長く入つてをれば、頭痛や眩暈がして、遂には倒れるやうになりませう。また大きな都市の人ごみの中に住んでゐれば、身體が自然に衰弱して、遂には病氣に犯されるやうになります。これはその部屋にをり、その都市に住む者の始終吸つてゐる空氣が悪いからで、家庭の禮儀もこれと同じ影響を持つてをります。それば かりでなく、禮儀のない家庭が濁つた空氣よりも一層恐しいのは、人間生存の第一義たる精神を腐敗墮落させて、すつかり人間を野蠻化させるからであります。家庭に於ける禮讓の有無乃至厚薄の感化は、實に驚くべく、恐るべきもので、それが自然の間に間斷なく行はれるだけ、決定

犯されるやうになります

朱に交れば赤くなる

見るに足らぬもの

的に人間一生の運命を左右します。諺に「朱に交れば赤くなる」といひますが、これは友を擇ぶ上に當嵌まるばかりでなく、更に適切に家庭の空氣に就いて言はれる事でありませう。

凡そどのやうな法律でも、また道德上の敎でも、家庭の禮儀を基礎として立つてゐないものはありません。それ故、家庭の禮儀が廢れると、どんなにりつぱな敎を說いても、嚴重な法律を設けても、その效果は見るに足らぬものとなるでありませう。それと反對に、若し家庭に於ける禮讓がりつぱに行はれてゐれば、別に高尙な敎を說かず、嚴しい取締を設けないでも、自然に向上して、美風がおのづからその間に成立ちませう。

社會を一つの大きな機械に喩へてみますと、禮儀はちやうどその機械を圓滑に運轉させる油のやうなものでありますが、その禮儀の本、油の源流は、家族生活の間に行はれる禮讓であります。たゞ「お早うございます」とか、「今晚は」とかいふやうな簡單な言葉の中にも、人の心を和らげる非常な力が籠つてゐるではありませんか。世にこれ程骨折が少くて效果の多いものは外にありますまい。さうして、ちよつとした物の言ひやう一つで、これ程人の感情を和らげる事が出來るとすれば、眞心からする禮讓の應接が、人の好感を得、社會の美風をなす基本となる事は言ふまでもない事であり

主婦であり、また人の妻であり、母である者が、この點に就いて特に深く注意すべきは、更に言ふまでもない事であります。

社會の基本は一家であります。社會の美風は一家の美風を擴大する事によつて實現する事が出來ませう。私ども現代の女性は更に一歩を進めて、一家の美風の源流は女子の心情にあるといふ信念の下に自重努力して禮讓の美風を家庭に實現しようではありませんか。

女子新國文　改制新版　卷二　終

通用字表

亙（コウ）—亘（クワン）　ワタル　桓ニ同ジ	体（ホン）—體（タイ）　笨、アラシ　カラダ
但（タン）—但（ショ）　タヾシ　ツタナシ	僣（テツ）—僭（セン）　ミダリガハシ　身分ヲ越エテオゴル
冑（チウ）—冑（チウ）　カブト　ヨツギ	協（ケフ）—恊（ケフ）　カナフ　オビヤカス
刺（シ、セキ）—刺（ラツ）　サス　モトル、ソムク	
台（タイ）—臺（タイ、ダイ）　星ノ名　ウテナ	後（コウ、ゴ）—后（コウ、ゴ）　ノチ　キミ
壺（コ）—壺（コン）　ツボ　宮中ノミチ	姫（シン）—姬（キ）　ツヽシム　ヒメ
托（タク）—託（タク）　拓ニ同シ　ヨル、タノム	担（タン、ケツ）—擔（タン）　ハラウ　ニナフ
改（カイ）—改（イ）　アラタム　星ノ名	
槍（サウ）—鎗（サウ）　ヤリ　鐘ノ音	欠（ケン）—缺（ケツ）　アクビ　カク
糸（ベキ）—絲（シ）　ホソイト　イト	羨（イ）—羨（セン）　地名　ウラヤム
虫（キ）—蟲（チウ）　魚介ノ總稱　ムシ	郤（ゲキ）—卻（キヤク）　ヒマ　シリゾク
鍛（タン）—鍛（カ）　キタフ　シコロ	
詫（タ）—詫（タ、タイ）　ワビ　アザムク	詔（テン）—詔（タウ）　ヘツラフ　ウタガフ
證（ショウ）—証（セイ）　アカシ、シルシ　諫ム	豊（レイ）—豐（ホウ）　禮ノ古字　ユタカ
迄（キツ）—迠（セフ）　マデ　行ク	選（セン）—撰（セン）　エラブ　ツクル

主要國字表

あはび	蚫	こむ	込	たすき	襷
あつぱれ	遒	こらふ	怺	たら	鱈
いわし	鰯	さかき	榊	つかえ	閊
おもかげ	俤	さゝ	笹	つじ	辻
おろし	颪	しぎ	鴫	とが	栂
かうぢ	糀	しきみ	梻	どぢやう	鰍
かし	樫	しつけ	躾	とも	鞆
かすがひ	鎹	しやく	癪	なぎ	凪
かせ	枠	すぎ	椙	なまづ	鯰
かます	叺	すべる	辷	にほ	鳰
かみしも	裃	そま	杣	はた	畑
くるま	俥	たうげ	峠	はたけ	畠
こがらし	凩	たこ	凧	はたらき	働

はなし	噺	ますむ	枡
ふもと	麓	むしる	捻
まさ	柾	もみ	籾
ます	枡	もみぢ	椛
むしる	捻	もんめ	匁
もみ	籾	やがて	軈
もみぢ	椛	わく	枠
もんめ	匁	をどし	絽
やがて	軈		
わく	枠		
をどし	絽		

主要宛字表

右の如き字はなるべく假名を使用すべし

おぼつかなし	覺束なし	でたらめ	出鱈目	むづかし	六ヶ敷
かひ（詮の意）	甲斐	とうとう	到頭	やたら	矢鱈
きつと	屹度	とかく	兎角、左右	やはり	矢張
さすが	流石、遉	とて、とても	迚		
しまふ	仕舞ふ	とにかく	兎に角		
せつかく	折角	なかなか	中々、却々		
だけ	丈	ふるまひ	振舞		
ちやうど	丁度	はかなし	果敢なし		
ちよつと	一寸、鳥渡	むだ	無駄		

昭和七年七月五日發行
昭和七年十一月十五日再版發行
昭和十年二月二十五日印刷
昭和十年二月二十八日訂正版發行
昭和十二年十二月二十四日訂正六版發行

女子新國文 改制新版
定價 二卷 金六拾錢

著作權所有
NAGAI 檢閲濟

編者 芳賀矢一
訂補者 橋本進吉
發行者 東京市神田區神保町一丁目三番地 合資會社 冨山房 同所冨山房社長
代表者 坂本嘉治馬
印刷所 東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地 大日本印刷株式會社

發行所 東京市神田區神保町一丁目三番地 合資會社 冨山房 電話神田代表二、一七一—二、一七番 振替口座東京五〇一番
（明治二十九年六月設立）

一ほ

中村民子